



北獨逸
邦

刑法草案
按辨由

第一篇

壹



司考書
刑考課

特719
6556

北
獨
乙
邦

刑
法
草
案
辨
由

第
一
篇

壹

昭和十八年正月十四日
鶴田乙丑氏贈

北獨逸聯邦刑法草案ノ辨由

緒言

千八百六十八年四月十八日北獨逸聯邦國會ニ
於テ聯邦普通ノ刑法ヲ設ケン_トテ決議シ且同
年六月五日聯邦議院モ此議ニ協同シタルヲ以
テ聯邦總宰之ヲ普漏生王國司法卿ニ申請シテ
此ニ草案ノ業ヲ起セリ

草案編
緝法方

此草案ノ方法ニ就テ先ツ左ノ件々ヲ記載セン
草案ヲ創ムルニ第一ノ要務ハ當時北獨逸諸國
ニ於テ施行スル諸刑法ヲ精細ニ搜知シ一々之
ヲ掲記シ調査ヲ遂ケ且彼此得失ヲ比較スル_ト
ナリキ

第一ノ要務已ニ了リテ北獨逸諸國ノ各刑法書

ヲ通曉シ且其他數國ノ刑法ノ利害如何ヲ比較
シ得タルノ後草案ノ為メニ最大事タルハキ左
事件ニ着手シタリ

北獨乙聯邦普通ノ刑法ヲ草スルニハ何レノ路
ニ由ルハキ哉ノ商議即チ是レナリ

此ニ二路アリ

第一毫モ従前ノ刑法ニ照準セス純ラ新タナル
草案ヲ作ル

第二従前ノ刑法昏ニ扱リ之ヲ増補擴充シテ完
全ナラシムル

左ノ議ニ從ヒ第二路ニ由ルニ決定シタリ

従前ノ諸法ニ扱リ之ヲ改正シ之ヲ増補シ以テ
新生ノ事變ニ折衷セント欲スル立法官ハ甚タ

稀少ニシテ従前定例ナキ事箇ニ於テハ新法

ヲ製シ其他ハ通常立法方畧自規範ニ從テ勉ム

ハキモノトス又従前ノ刑法書ヲ顧照シテ草

案ヲ製スル片ハ新法ヲ設ケル為メニ實際ノ利

益甚タ大ナルヲ以テ殊ニ此議ニ決シタリ

上ノ理ニ由リ純ラ新タナル刑法書ヲ編輯スル

テラ措キ従前施行ノ刑法書ニ據リ草案ヲ作ル

ニ決定シ最モ適當ナルモノトシテ千八百五十

一年四月十五日頒行人普漏生刑法昏ヲ撰シタ

リ
斯人如ク普漏生刑法ヲ後摘スルハ全ク實際ノ
便宜ヲ圖ルモノニシテ必シテ自余獨乙諸國刑

法昏ノ勝劣ヲ見ルニ非サルナリ

此ノ刑法書ハ第一ニ幾シト二十年間北獨乙聯
邦ノ最大國ニ行ハレ第二數多ノ連邦ノ刑法省
ハ此等漏生ノ制定ヲ龜鑑トナシ第三北獨乙諸
國ノ法律家及ヒ其他ノ諸人ニモ此刑法省ヲ通
知スル者最モ衆ク第四法律家及ヒ陪審人モ此
法ニ實觸レタル者他ニ超絶シ第五此刑法省ノ
如ク精密且明瞭ナルモノハアラス
斯ノ如ク此刑法省ハ法律學及ヒ其施行ニ當テ
之ヲ試檢スルニ欠漏ナク決シテ他ノ刑法省ニ
劣ルヘキモノニ非ス故ニ普漏生人ニモセヨ普
漏生人ニ非サルニモセヨ若シ北獨乙聯邦ノ刑
法書ヲ製セント欲スル者ハ自然此普漏生ノ刑
法省ヲ撰ミテ原稿トナサシト必然ナリ

其原稿トナスヤ畢竟其省ノ順序編綴ノ簡約殊
ニ瞭然タル法律語ヲ用ヒタル等ノ其好事ヲ採
摘シタルノモシテ法律學及ヒ其施行ニ當テ
ハ確的ナラサルモノハ之ヲ捨テ他人ノ刑法書中
ヨリ良法ヲ撰ミ出シタルト固ヨリ言テ待タサ
ルナリ
以上ノ所見ニ從テ等漏生刑法書ヲ訂正擴張シ
テ北獨逸聯邦刑法省ノ草案ヲ起シタリ
已ニ草案創業ノ初期ニ在テ聯邦ノ諸政府協力
ヲナス片ハ其益甚ク大ナラシトテ確認シ得タ
リ
即チ此ノ新製ニ関シタル諸訊問ヲ疾ク聯邦ノ諸
政府ニ報知シ互ニ其說ヲ出サシムル片ハ末期

ニ至リテ紛紜ヲ生スルヨリモ此草案ノ業甚タ
容易トナリ且速成ス可キナリ
此ニ於テ草案ノ際已ニ數多ノ訊問ヲ各政府ニ
出シ各府ヲ集メ之ヲ登録シ草案ヲ製スルノ此
較トナシタリ而シテ是レ亦銓簡ノ適當ヲ得タル
ノ明證トナレリ
一箇ノ政府ニテ定メタルヲ以テ足レトナス
ハキ條々ハ事ヲ簡易ニセシカ為メニ之ヲ總連
邦政府ニ訊問セサリキ
此ノ訊問ヲナスニ付キ諸政府ヲシテ只ク論理
ニ馳セタル回答ヲナサハテシムルヲ注
意ス
ハキト信シタリ何トナレハ刑法ノ精理ヲ穿鑿
スル法律學師ハ此ノ如キ論理ヲ解明研究スル

ヲ以テ最上ノ務トシ且其功アリト雖モ刑法ヲ
新製セント欲スル立法官ニテ新律ノ條例ヲ
章分セズ唯ク主旨ヲ擧ケテ訊問シ論理ノ之ヲ
取ル片ハ其益少ナキニナラス却テ危險ニ且
ルヲ屢々之レアルヲ以テナリ
此故ヲ以テ諸人ノ主張セシ如ク先ツ北獨逸聯
邦刑法ヲ草案スルニ準照スハキ主旨ニシテ刑
法各ノ前加規則トナスハキモノヲ議スル為ニ
國會ヲ開クヲ立法上ニ不適當ナルトナシ
之ヲ止メ直ニ法書ノ体裁ヲ以テ草案ヲ創ムル
トニ決シタリ
此草案ヲ實施ノ法トナス片ハ當今猶ホ數様ナ
ル聯邦内ノ刑事一致ニ普通ノ刑法トナルベシ

其普通トハ聯邦内諸邦ノ境畧ヲ論セス五ニ外
國又ハ外國人ト稱スルヲナク千八百六十九年
六月二十一日ノ法令(千八百六十九年聯邦法令
誌第百五十三葉表以下百五十八葉表ニ至ル)ニ
從ビ且北獨乙聯邦法制第四條第三節ニ擧ケタ
ル如ク刑法一統ヲ來スラ云フナリ
斯ノ主旨ニ從ビ普通漏生刑法畧ヲ變更シテ北獨
乙聯邦刑法畧ヲ製スルニ至リ草案ノ條例ニ其
主旨ニ準レテ之ヲ設ケ普通罪科ニ非スレテ公
事ニ関スル諸刑例ニ於テハ殊ニ其旨ヲ遵奉ス
ハレトス
何トナレハ此公事諸刑ニ関スル事件ハ實際ノ
施行ニ於テ通常刑事且其普通ノ律例ヲ要ス

普通漏生刑
法書ト草
案ト相異
ナル箇條
ノ大略

ルヲ切ナルヲ以テナリ
普通漏生一國內ニ施行セシカ為メニ其國ノ事情
ニ應ジ編輯シタル刑法書ヲノ同盟連邦及總國
内ニ通用セシムルニ就テハ其書ノ大變化ヲ受
シ可キヲ固ヨリ得サルノ理ナリ
此他亦別ニ數多ク變化アリ是レ普通漏生刑法畧
ト北獨乙連邦刑法草案トヲ比較スルニ非レハ
精細ニ見ルヲ得スト雖モ其變化ノ件カテ逐
一枚擧スル片ニ條例ノ一々相同シカラサルト
又其兩書ノ体裁相異ナルトハ大率之ヲ認ムル
ヲ得ベシ故ニ今左ニ草案中ノ重大ナル變化
ノ件ヲ掲ケントス
第一死刑ハ普通漏生刑法書ニ於テハ十四件アリ

リト雖氏聯邦刑法草案ニ於テハ聯邦君主ノ謀
殺聯邦君主ニ對シタル謀反及ヒ暴行ノ三重罪
ニ止マレリ

聯邦刑法草案ノ第九條六十七條八十條百八
十五條普漏生刑法書ノ第六十一條六十七條
六十九條七十四條百七十五條百七十八條百
七十九條二百八十五條二百九十條二百九十
四條三百二條三百四條ヲ比較セヨ
第二 最重ノ有期徒刑二年ナルモノヲ一年ニ
減シ最輕ノ二十年ナルモノヲ十五年ニ減シ最重
ノ有期城寨禁二十年ナルモノヲ十年ニ減シ夕
草案第十一條十三條普漏生刑各第十條十三

第五十條
各罪ノ
至ニ
連入
一

條ヲ比較セヨ
第三 徒刑ニ処スルト雖氏財產自由ノ權ヲ失
フヲナク又後見人ヲ立ルヲ要セサルニ至レ

聯邦刑法草案第十二條普漏生刑法各ノ第十
一條ヲ比較セヨ
第四 贖罪ヲ羈絆ノ刑ニ移スニハ二年若クハ
縱令ヒ數重罪或ハ數輕罪ヲ合併スル氏四年ノ
禁獄ニ過ク可カラサルモノトス
草案第二十三條六十五條普漏生刑法各第十
七條五十六條ヲ比較セヨ
第五 加辱ノ刑ニ就テハ左ノ如クスルニ至レ
リ(一) 徒刑ニ於テ必ス民權ヲ剝奪スルノ律ヲ廢

數罪人ヲ一
室ニ繫カスシ
テ各罪人室
ヲ別ニスル
者之レヲ孤

ス(二)徒刑及ヒ其他ノ加辱刑ニ於テ民權剥奪ノ
當否ハ犯事ノ情状ニ從ヒ裁判官ノ所見ニ任ス
但シ誣告犯姦劫迫ニ係リタル重罪ハ必ス民權
ヲ剥奪ス(三)有期ノ羈絆刑ニ在テハ決シテ終身
ノ民權剥奪ヲ科スルヲナク十年ヲ以テ最重ノ
モノトス可シ

草案第二十五條二十七條百三十四條百三十
五條百三十六條百五十八條二百三十一條普
漏生刑法書十一條十二條二十一條二十二條
ヲ比較セヨ

第六 徒刑及ヒ禁獄ハ孤囚ニ繫ク下ヲ得
草案第十七條十八條ヲ見ヨ
第七 多年間ノ徒刑或ハ禁獄ニ処セラレ半期

因ト云

ニ及ビタル者ヲ試シニ放解シ悔悟ノ処行アル
者ハ殘刑ノ半期ヲ赦免スルコトアリ
草案第十九條乃至二十二條ヲ見ヨ
第八 警察監護ニ就テハ左ノ如クスルニ至レ
リ

(一) 警察監護ヲ受クヘキ罪科ノ數ヲ減シタリ
(二) 當議ノ一件ニ限り情状ニ從テ警察監護ヲ受
ケレムルト否トハ裁判官ノ所見ニ任ス

(三) 警察監護ヲ受クヘキノ裁判ヲ言渡シタル片
ハ該國ノ警視廳ヨリ監護ヲ付スハレ
草案ノ第三十三條三十四條普漏生刑法書ノ
第二十六條二十七條二十八條ヲ比較セヨ
第九 重輕罪未成ノ者ハ既行ノ者ヨリモ其刑

輕カル可シ

草案第三十八條三十九條普漏生刑法第三十
二條三十三條ヲ比較セヨ

第十 發意自由ヲ妨碍セラル、ヨリ生スル罪
科ハ其刑ノ等位ヲ減シ罪状未成ニ準スベシ

草案第四十六條四十七條ヲ比較セヨ
第十一 追糾ヲ受クハキ年齡ハ十二歳ヲ以テ

始トス

草案第四十九條普漏生刑法第四十二條ヲ
比較セヨ

第十二 同罪科ノ最輕ノ罰ヲ廢棄シタルト少
ナカラズ又普漏生刑法書ニ於テ許容ロサル刑
罰減等ノ件ヲ設クルト多シ

第十三 審判ノ為メニ拘留ニタル時間ハ之ヲ

刑期中ニ算入スルトアリ

草案第五十三條比較セヨ

第十四 訴訟ヲ待テ初テ追糾ヲナスハキ事件

ノ數ヲ増殖シタリ

殊ニ草案按第百五十五條二百七十九條二百八

十條二百八十一條ヲ比較セヨ

第十五 特ニ追糾中而已ナラズ刑名宣告ノ既

決罪ニ於テモ期滿免除ノ律ヲ設ケタリ

草案第五十九條六十二條普漏生刑法第四

十五條四十六條四十九條ヲ比較セヨ

此變化ノ件々ヲ擧ケタル后當テ當時各聯邦内

施行スル所ハ刑法ヲ擧ケン

北獨乙當今
ノ律例

第一 普漏生刑法局ハ千八百五十一年四月十四日ニ頒行シ、爾後改正増補シ、千八百五十九年ノ第三 癸官版ヲ以テ之ヲ刊行シ、獨乙普通律例ヲ用フルヲ「イウエンブルグ地」及ヒ千八百十三年頒行ノ「バイエル」國刑法ニ基キタル千八百十四年ノ刑法書ヲ用フルヤ「イクテ地」ヲ除クノ外千八百六十七年以來全王國一般ニ此法ヲ施行ス

第二 「サツキセン」ハ千八百五十五年八月十五日ノ頒行ニシテ千八百五十六年千八百五十八年千八百六十一年及ヒ千八百六十八年ニ於テ改正シ、千八百六十八年十月一日 癸行シタル「サツキセン」王國刑法局ト稱スルモノヲ用フ

第三 「バツセン」ハ千八百四十一年九月十七日頒行

千八百四十九年千八百五十二年千八百五十五年改正「バツセン」大公國刑書ヲ施行ス

列ルムスタツト府千八百五十三年官版ノ刑法局ヲ比較ス可シ

此國ノ刑法局ハ千八百六十七年ニ至ルマテ「ナツサウイン」河畔「ラシクヌオルト」ハツセン、ホ各ブルク各地ニ於テ之ヲ施行セリ

第四 「ソツケレンブルク、シユウ、リリン」ハ特種ノ法令及ヒ慣習ノ裁判法ニ從ヒ變更シタル獨乙普通律例ヲ用フ

上ノ法令ノ大切ナルモノハ千八百三十九年一月四日 癸ノ竊盜律千八百五十三年五月三十一日 癸ノ法制違反ノ重輕罪律千八百五十

四年五月二十七日 癸ノ放火律千八百五十六
年三月四日 癸ノ出版^律千八百六十一年一月一
日 癸ノ罪犯未成律是レナリ

第五「サツセン、ワイマール」ハ千八百五十年三月
二十日ノ法令ニ由テ採用シタル「^{エー}リッピンギヤ」
刑法^律施行ス是レ「^{エー}ナ」府ニ於テ盟約シタル
「^{ワイ}マール」^{マイ}ニシゲン「^{アル}テンブルグ」^ゴー
ブルク、^ゴータル「^{トル}フスタツト」^ゾンデルス
ハウセン」旧族「^イス」新族「^イス」^アーンハルト
ノ諸國ニ於テモ採用セラル但シ「^{アル}テンブル
ク」ハ此例ニ非ラス
第六「^スックレンブルグ」^{スト}レ「^リツツ」ハノツクレ
ンブルク、^シユウ「^リント」^ト致シ兩國相通レテ

発行シタル法令ニ從ヒ變更シタル獨乙普通律
例^律施行用ナル「^シユウ」^ヘ「^リン」^ト大公國ノ如
シ

第七「^オルデンブルク」ハ普漏生刑法^律三模擬シ
千八百五十八年七月三日ニ頒行シ千八百六十
一年及ビ千八百六十八年ニ改正シタル刑法^律
ヲ用フ

第八「^ブラウン」^シユ「^ワイギ」千八百四十年七月十
日頒行千八百五十二年千八百五十六年千八百六
十三年千八百六十七年改正ノ刑法^律施行用フ
第九「^サツキセン、^マトニシゲン」ハ千八百五十年
六月二十一日ノ法令ニ從ヒ「^シユ」^トリッピンギヤ刑
法^律施行用フ

第十「サツキセシ」アルレンブルグ「千八百三十八年頒行サツキセシ」王國刑法書ニ基キ編輯シタル「千八百四十一年五月三日頒行ノ刑法書ヲ用ル」
第十一「サツキセシ」コーブルグ「ゴータ」ハ「コーブルグ」府ニ於テ「千八百五十年十一月二十九日」及「ゴータ」府ニ於テ「千八百五十一年十二月二十三日」
「スロウ」
第十二「アインハルト」ハ「千八百五十年五月二十八日」
「キョーレン」府並ニ「デツナウ」府及「千八百六十四年七月一日」
「ベルンブルグ」府ノ「法令ニ從ヒ」
「チエーリシギヤ」刑法書ヲ用ス

第十三「シユワルツブルグ」
「千八百五十年四月二十六日」
「スロウ」刑法書ヲ用ス
第十四「シユワルツブルグ」
「千八百五十年三月二十五日」
「スロウ」刑法書ヲ用ス
第十五「シユワルツブルグ」
「千八百五十五年五月十五日」
「スロウ」刑法書ヲ用ス
第十六「シユワルツブルグ」
「千八百六十八年九月五日」
「スロウ」刑法書ヲ用ス
第十七「シユワルツブルグ」
「千八百五十二年四月十日」

四日ノ法令ニ從ヒ「チユーリーニンギヤ」刑法各ヲ用
 フ
 第十八シヤウンブルグリツプ「ハ」獨逸普通律例
 各ヲ用フ
 第十九「リツペ、テトモルド」ハブラウンシユワイ
 キ「刑法書ニ同一ナル千八百四十二年七月十八
 日頒行ノ刑法書ヲ用フ
 第二十「リユー、ベツキ」ハ普漏生刑法各ニ模擬シ
 タル千八百六十三年七月二十日頒行ノ刑法各
 ヲ用フ
 第二十一「ブレ、ローメン」ハ獨逸普通律例書ヲ用フ
 第二十二「ハンブルグ」ハ千八百六十九年四月三
 十日頒行ノ刑法各ヲ用フ

以上ノ表ニ從ヒ北獨逸聯邦ヲ各々其施行スル
 所ノ刑法書ノ異同ヲ以テ類聚スル片ハ左ノ如
 シ

甲 千八百五十一年四月十四日頒行ノ普漏生
 刑法書ヲ用フル諸邦

- 一 普漏生王國「ラ」ニウ「コ」方「ブル」除「グ」ヤ「グ」
 - 二 「ワ」ル「デ」ツ「キ」候國「セ」ハ「ハ」百「十五」時「以來」
 - 三 「ホ」ル「グ」シ「ブル」グ「大」公「國」七「月」八「日」百「十五」時「以來」
 - 四 「リ」ユー「ベ」ツ「キ」共和國「三」月「八」日「百」六「十」時「以來」
- 乙 千八百六十八年十月一日頒行ノ段定「ガ」ツ
 キセシ「王國」刑法書ヲ用フル邦
- 一 「ガ」ツ「キ」セシ「王國」
- 丙 千八百四十一年九月十七日頒行ノ「ハ」ツ「セ

シ大公國刑法書ヲ用フル邦

一 「バツセン」大公國千八百四十二年

下 「チューリンギヤ」刑法書ヲ用フル諸邦

一 「ザツキセン、ワイマール」大公國千八百五

以二十日

二 「マイニンゲン」公國千八百五十二年

三 「ゴールブルグ、ゴータ」公國千八百五十四年

以來

四 「アーンハルト」公國千八百五十二年

五 「シュワルツブルグ、ルトドルフスタット」候

國千八百五十二年

六 「シユワルツブルグ、ザールスハウゼン」

候國千八百五十二年

七 「旧族ロイス」候國千八百六十八年

八 「新族ロイス」候國千八百五十二年

ア 「イゼナ」府控訴裁判所貫屬ノ「チューリンギ

ア」諸國ニ於テハ刑法上別ニ盟約ヲナスコトアリ

即チ千八百五十年二月廿日「チューリンギア」刑

法ヲ「ワイマール」ニ收用スル條例中第十一條ハ

「ルトドルフ、ゾントルスハウゼン」ロイス諸國ノ

收用條例及ビ千八百六十八年七月二十四日発

コ「ブルク、コトタ」ノ法令ト同シク左ノ定規ヲ

載セリ

曰刑法各及ビ刑法ニ係リタル諸規則中内國

ト外國ト内國人ト外國人ト區別スルノ処ニ

於テ總テ内國トハ即チ布告ノ刑法各ヲ己ニ

施行シ或ハ施行スベキ卷首ニ擧ケタル「テニ
ーリニングア」諸國并ニ同旨ヲ採用スル獨乙諸
國ヲ指シテ云々此諸國所屬ノ人々ヲ内國人
ト云フ

戊 千八百四十年七月十日頒行ノ「アラウシユ
ワイグ」刑法書ヲ用フル諸邦

一 「アラウシユワイグ」公國 肝一八百四十年十
二 「ソッペデットモルド」候國 肝一八百四十年十

己 千八百三十八年頒行ノ「サツキセン」王國刑
法各ニ基キ編纂シタル千八百四十一年五月三

日頒行ノ「アルテンブルグ」刑法各ヲ用フル邦
一 「アルテンブルグ」公國 肝一八百四十年十

庚 千八百六十九年四月三十日頒行ノ「ハンブ
ルグ」刑法各ヲ用フル邦

一 「ハンブルグ」共和國
辛 獨逸國普通律例各ヲ用フル諸邦

一 「テウエンブルグ」普漏生ニ屬ス
二 「グツクレンフルグシユウヘーリ」大公

三 「メツクレンブルグストレーリツツ」大公
國

四 「シヤウンフルグソイツペ」候國
五 「ブレローメン」共和國

斯ノ如ク當今聯邦内施行スル所ノ刑法ノ數様
ナル者ヲ一致セシメント即チ此刑法草案ノ要
務ニシテ且其目的トスル所ナリ

今草案ノ各例目ニ付キ原論ヲ起ス前ニ其各章
各例ニ就テ一々解明論説スルヲ此原論編纂ノ
先務トセザリシトテ記載セサルヲ得ス
其先務トセサル所以ノモノハ全ク新タル法
律ヲ設クルニハ上ノ如ク各條毎ニ其原由ヲ解
明スヘシト雖氏此ニ多年施行シ理上元ニ實際
ニ於テモ十分ニ研究シタル刑法昏ヲ基本トシ
テ其体裁ハ殆ント同一ナルニキ草案ヲ作
ルニハ各條ノ原論ヲ緊要ナリトセサルヲ以テ
ナリ縱令又各條悉ク其原由ヲ解明シ普漏生刑
法ト同一ナル各條ヲモ漏サシメザラント欲ス
ルモ其實ハ已ニ良好ノ原論アルモノヲ唯タ言
辞ヲ異ニシテ一様ノ事ヲ再々説明スルニ過干

刑法比較表
死刑論及
載判匠務
議案ヲ見

サルノミ故ニ草案中普漏生刑法書ト異ナル各
條ノミ原由ヲ記載シ又其一致スル緣由ヲ解明
スルトテ以テ重モニ此原論ヲ作ルノ要務トナ
シタリ
擧用シタル例目ノ原由ヲ解明スルニ法律史上
ノ事ヲ掲ケ又其例目ヲ他ノ刑法昏及ヒ刑法草
案ト比較スルトテ要スル片ハ引用昏名ヲ時々
其條下ニ揭示シ文辞ハ原籍ニ仍テ之ヲ記載ス
是レ其例條ノ評ヲ下スニ若シ原籍ヲ見シトテ
要スル人アル片ハ縱ニ之ヲ得セシメ而メ此昏
ニ於テハ廣ク之ヲ載スルノ煩難ナク却テ讀者
ヲシテ瞭察シ易カラシムルヲ以テナリ

リタルト少カラス然レ此獨乙刑法ハ佛蘭西法
ニ擬シタリト云フ可カラズ又近世獨乙ニ於テ
陪審裁判ヲ再復シタルモ必ス佛蘭西ヲ學ビテ
然スルニ非ルナリ

或人云ヘルアリ此三罪區別ハ違犯ニ誤ルハキ
罰ノ種類ト等級トヲ以テ之ヲ論シ犯事ノ内性
ニ從テ之ヲ設ケタルモノニ非レハ徒ニ外政ニ
走リ事ノ真理ニ適ハサルカ故ニ取ル可テサル
ナリ云々千八百六十二年巴理府三十一行第一版
然レ此說ハ真ニ適當ヲ得タルニ非スレテ唯
夕外見ノ的中スルカ如キニ過キサルノ何ト
ナレハ各罪犯ニ先ツ種類ヲ分テ置キ其罪犯ニ
誤ツ可キ刑名ヲ其罪犯ノ種類ニ從テ定ムルモ

又初メ各罪犯ニ誤ツハキ刑ヲ定メ置キ其刑ノ
輕重ニ從テ其罪犯ノ種類ヲ分ツモ實事ニ於テ
ハ畢竟異ナル所ナキヲ以テナリ

又此三罪區別ハ情状ヲ斟酌シ以テ罪等ヲ減ス
ルニ十分ナラサルト云フノ說アリ千八百五十年
氏著述普通漏生刑法陳案第一冊增補百三十一葉表
並ニ以下ノ條及シテハ百五十一葉三十一葉表
ニ百七十條ヲ見ヨ

設令ハ刑法草案ニ於ルカ如ク罪犯ノ状情最モ
重キ者ヲ処スル刑罰ノ種類ト其度トヲ以テ三
罪ノ區別ヲ立ルノ憑據トナス片ハ此抗論モ亦
之ヲ挫クコトヲ得可シ

三罪區別ノ抗論家モ殊ニ此論ニ從テ特自ノ說

ヲ止メタリ

此ニ反シテ刑法各中重軽ニ罪ノ外部ノ経界ヲ
設クルハ必要ナラサルトノ論ハ之ヲ容領ス可
シ例ヘハ佛蘭西刑法各ハ此ニ罪ヲ全ク區別シ
テ著シク分界ヲ立テタル各篇ニ於テ論セス其
一部分ハ同処ニ於テ共ニ之ヲ擧クルカ如シ
上ノ論ハ元來其分界ヲ立テ難キヨリ起ルニセ
ンモノニハ非ス又決シテ律例ノ外形ノ簡易ヲ貴
ブヨリ生スルニモ非ス刑法各第三年刑戒一編西
一節ノ原論ヲ
前ノ學說ト殊ニ殆ント二十年間北獨乙中最モ
廣キ土地ニ習慣シ法律家先ニ其他ノ人々ニモ
熟知セラレ且審判上容易ナルトヲ得ル利益ト

類似ノ律例
ヲ以テ処刑
スルヲ許
サス

ヲ慮リ該草案ニ於テモ此三罪區別ヲ保存セリ

第二條 草案第二條ニ於テハ惡事實施ノ前ニ

當リ其犯ニ該ツ可キ律例ヲ定ムルトナキモノ

ハ之ヲ罰ス可ラサルノ定規ヲ掲ク

此定規ハ第五五カノ刑法書ニ於テハ未タ

設ケサル所ノモノニシテ千七百五十六年

書第百五條ノ註ニ刑法千七百年代ノ末ニ至リ

刑法學上大ニ之ヲ主張シ千七百九十

百八十年著述ニ於テハ翻譯第百四十一

年著述ニ於テハ翻譯第百四十一

刑論各編ノ各ノ第七條官以下注意ス

ニ在テハ一兩家ヲ除クノ外成ルハ百六十

八年ノ原由刑法ノ草案ノ第六條表以下

八十年ノ原由刑法ノ草案ノ第六條表以下

律ハ寛ナル者ニ從フ

ノ主旨ヲ擧ク
規ノ外又同條ニ於テ若シ數律ノ一罪ニ該ツヘ
キモノアル片ハ其寛ナルモノヲ取テ処ス可キ
上ノ如ク類似ノ律例ヲ以テ処刑ス可ラサル定
草案第一節第五條第六十七百六十八年六月十八日頒行
ツキリセリトガ先府出刊表ニ於テハ
五十年論第一編四十六卷
表ル氏千八百五十年刑部註解三十四卷
法立序論第一編四十六卷
十ニ葉裏以下各條
ル六葉裏以下各條
ノ如ク類例ノ律例ヲ以テ処刑ス可ラサル定

罪犯ノ當日ヨリ裁決ノ日ニ至ルノ間ニ律或ハ
數律ヲ設クルヲ可シ
如斯ノ際ニ在テハ罪犯ノ當日施行シタル律ト
裁決ノ日現在施行スル律トノ中寛ナルモノヲ
取テ用フヘキ乎又其二律ノ輕重分明シ難キ片
ハ中間ノ律タリ氏尚ホ寛ナルモノヲ撰シテ可
ナラン乎ノ疑ヲ生スルヲアラシ
此疑問ノ決定ハ學問上ニ於テ討論ナキニ非ス
之ヲ可ナリト云フ人ハ寛宥ナル法ヲ設ルヤ罪
犯人ハ則チ其寛宥ナル刑ニ処セラル可キ權ヲ
得タルナリト唱ヘルハ再版三十一卷ノウオリ
三十一卷ノ刑部註解第四十七卷ノル氏千八百
十一年ノ刑部註解第一卷ノ第六葉裏以下各條
七年刑部註解第一卷ノ第六葉裏以下各條

刑部註解

葉 改訂不可ナリトスル人ハ只裁法ノ日ニ當リ
施行スル律ノ寛宥ナル片ニ限リ罪犯當日ノ律
ニ由ラスレテ裁決現日ノ刑ヲ用フ可レト云フ
千 適用ノ五分限第ニブルリ
十 七年ノサツキセト玉ガ
百 五 十 八 年 一 葉 府 出 版
刑 法 一 立 序 葉 論 第 一 次 葉 第
改 草 案 モ 他 ノ 刑 法 局 即 千 八 百 五 十 三 年 六 月
十 七 日 頒 行 ヲ ヌ ル テ ン ブ ル グ 刑 法 局 第 十 三 節
ニ 謂 フ 所 ノ 如 ク (政 事 誌 第 十 七 号 八 十 五 葉) 假 令
ヒ 中 間 ノ 律 例 タ リ 凡 寛 宥 ナ レ ハ 即 チ 其 法 ヲ 以
テ 罪 ヲ 糾 ス 可 キ 憐 愍 ノ 所 為 ニ 決 着 レ タ リ 未 タ
刑 ヲ 受 ク サ ル モ ノ ト 雖 凡 已 ニ 刑 名 ヲ 宣 告 シ タ

ル者ハ其刑ヲ移シテ寛典ニ処ス可ラサルモノ
トス
蓋シ已ニ刑名ヲ宣告シタル片ハ正シク其刑ニ
処ス可クシテ其宣告后ニ出テタル律例ニ依ル
可ラサルハ理ノ當然タルヲ以テナリ又假令ヒ
此ニ依ラント欲スルモ未タ刑ヲ遂ケサル罪人
ニ對シ總テ新製刑法局ニ從ヒ再考スルハ甚タ
難クシテ實際施行シ能ハサルト言ヲ待タサル
ナリ
是ヲ以テ千八百五十一年普漏生刑法局発行ノ
ノ例ニ倣ヒ法九百五十七葉刑名ヲ宣告スルモノハ之ヲ寛典ニ
於テモ已ニ刑名ヲ宣告スルモノハ之ヲ寛典ニ
移スナラザルモト決シタリ

第三條 第四條 聯邦法制中聯邦内刑法ニ係ル
條例^{第一節}之^{第十}三條^亦第^二於^テ聯邦ノ諸國ハ
之ヲ合セテ一國ト見做スヘキ^一ラ掲ケタリ
此書ノ首項ニ於テ舉ケタル如ク^一チユ^一リニキ
アル諸國ニ於テ内外國羌内外國人ノ區別ヲナシ
タルノ類ハ北獨乙聯邦刑法各ヲ遵奉スルノ諸
國及ビ諸國人ニ於テハ自今之ヲ^一発^一示^一ス可シ此
區別アルニ付キ各邦約ノ如ク相交リ境界犬牙
ノ如ク相接スルヨリ生スル所ノ混難ナル行法
上ノ區畫及ビ追^一糺^一上ノ困難ハ聯邦法制書ニ載
セタル法律一致ノ旨ニ從^一ビ亦自^一ラ消失ス可キ
ナリ
上ノ如ク聯邦法制ニ準據シ草案第三條及ビ第

四條ニ於テ聯邦刑法ノ所轄ヲ定メタリ但シ其
式ハ普漏生刑法書ニ做^一ヘ^一リ
聯邦立法ト各政府立法トノ關係ニ付キ聯邦法
制第二節ニ舉ケタルヨリ猶ホ明細ナル特殊ノ
規則ヲ立ルハ聯邦刑法各ノ要務ニ属セサルモ
ノトセリ法律一致及ビ法律確定ノ為メニ緊要
ニシテ聯邦法ト并行ハル可キ或ハ后来設ク可
キ國法ハ其刑法各ヲ^一発^一行^一スルニ當リ詳ニ之ヲ
發行條例中ニ載ス可シ
草案ノ第三條及ビ第四條ハ普漏生刑法各ノ第
三條及ビ第四條ニ照應シ僅ニ聯邦法制ノ為メ
ニ不得已ノ部分ヲ變更シタルノ法律所轄ノ
法ニ付キ萬國公法ニ所謂境外權ヲ除クノ外罪

犯ハ犯人ノ貫屬ヲ問ハス總テ其土地ノ律例ニ
從之ヲ処刑シ例ハ外國人内國ニ於テ罪ヲ
犯ス片ハ内國ノ法ヲ以テ之ヲ罰ス可キノ類ニ
シテ此主旨ハ近世諸國ノ立法官ニ於テモ又ハ
學問上キヨルストル氏律例ノ法分限ステ一
條兼第百八十一條刑法ニ在テモ一般ニ容ル
、所ナリ故ニ別ニ亦論ヲ要セス
未成犯及ビ從犯ニ於テ問々生シタルトアルカ
如ク犯地ヲ定ムルニ就テ起ル所ノ疑問ヲ解明
スルハ草案ノ事件ニ非ルモノト為セリ故ニ「
」セシ刑法書ノ第三條ニ應ス可キ未成犯審判
ノ律例ハ如キハ草案中ニ之ヲ載スルトナシ
又北獨乙軍艦及ビ商船ニ對シタル所犯ニ就テ

一々律例ヲ設クルトハ草案ノ預テサル所ト為
セリ此等ノ諸件ハ通常萬國公法ニ論スル所ヲ
以テ足レリトス「
」五葉裏〇ル氏律令ノ分限第
四
篇第百十九條氏表〇大審院裁判論第
四
冊
陳案第百七十一條裏〇氏刑法而ノ水夫等
ノ状情ニ就テ他ニ規則ヲ要スルノ分ハ別ニ
種ノ法ヲ設ク可シ
又例ハ「
」サツキセン刑法書ノ第九條等ニ擬シ内
國ニ於テ犯シ己ニ外國ニ於テ刑セラレタル罪
科ハ内國裁判ヲ以テ再ビ之ヲ罰ス可カラス或
ハ輕ク罰ス可キ等フ規則ヲ設ケ以テ北獨乙聯
邦内ニ在テ犯シタル罪科ハ悉ク聯邦刑法ニ依
テ之ヲ処置ス可キ普通ノ法ハ勉メテ之ヲ変更

ス可ラサルモノトセリ。若シ他所ニ於テ一タ
 ビ処刑シタル罪科ヲ追糺セサル可カラサルキ
 ハ其事ニ預ル裁判所ノ所見ニ任セ或ハ刑事裁
 判法ニ於テ定例アルモノハ此ニ從テ処置ヲナ
 ス可シ
 第四條ハ刑法所轄外ノ國ニ於テ犯シタル罪科
 ニ及ホス可ラサルヲ論ス
 其例外ニ置ク可キノ件々ハ普遍生刑法各ニ準
 酌シテ之ヲ定メタリ然レモ此等ノ件々ハ内國
 ニ於テ必ス罰ス可キモノト為スニ非ヌメ罰ス
 ルヲ許スノミナリトス而メ其所轄外ノ國ニ
 於テ犯シタル罪科ヲ罰セサルハ内國刑法ノ維
 持ニ関スルト否トヲ判決スルハ追糺ニ預ル所

ノ裁判所ノ所見ニ任ス可シ
 第一号元ニ第二号ノ規則ハ總連邦或ハ其各邦
 ノ永安静謐ヲ保護スル為メニ捨ツ可ラサルモ
 ノトス而メ聯邦各國ハ聯邦同様ノ保護ヲ得可
 キナリ
 他ノ獨乙諸國并ニ自余ノ諸國ニ於ルカ如ク第
 三号外國ニ在テ犯シタル北獨乙人ノ罪科ニ係
 ル規則ヲ擴充シテ之ヲ外國人ノ外國ニ於テ北
 獨逸人ニ對シ犯シタル罪科ニ及ホス可キ或ハ
 然ラサルキ亦疑フ所アル可シ
 是レ則チ普遍生刑法各ト旨趣ヲ同ウシ罰ス可
 ラサルモノト決シタリ
 開化ノ諸國ニ於テハ
 内外國人ニ對シタルヲ問ハス私重罪ハ之ヲシ

テ遺棄スルノ所ナシ若シ処刑セテレサル外國
人内國ニ在留スル片ハ之ヲ放逐シ或ハ之ヲ其
本國ニ引渡ス_一ヲ得可シ○又譬ヘハ二人闘及
血族姦ニ於テ能所ヲ區別スルニ屢々困難ヲ
生スル等ノ如キ私重罪ノ情状ハ之ヲ審論セス
第_一百_六十七_七萬國民法及_レ刑_法草案ニ於テハ普
漏_一刑法_各ト異ニシテ已ニ刑名ヲ宣告シタル
罰ノ期滿特免法ヲ收用シタルヲ以テ外國ニテ
已ニ裁判ヲ得タル罪科ニ於ルモ此法ヲ擴充シ
期滿ノ后ニ至ラハ之ヲ罰ス可_一ヲサルモノトセ
リ
然レ_レ外國ノ刑典寬宥ナル片ハ其律例ヲ以テ
処刑ス可_一トノ規則ハ第一實際ノ困難ヲ生ス

ルニ因リ第二殊ニ左ニ普漏_一刑法書再考ノ旨
ニ從_レ之ヲ容ル_一トヲ得ス
千八百四十三年ノ再考第六葉表及_レ千八
百四十七年ノ草案原由第二葉裏
罰ス可_一キ所行ヲナシ自_レ罪_一アル_一トヲ覺悟ス
ル所_一人ニ在_レテ刑典寬嚴ノ僅少ナル差ハ最
大事ト為スニ足_レラス云々
普漏_一刑法書ノ如ク草案ニ於テモ違令ノ罪ハ
政府ノ條約ニ係ルカ或ハ特別ノ法令ニ觸ル
ニ非_レハ之ヲ罰セサルモノトセリ○是レ警察
懲治ノ通則ニ背ク者警察ニ関スル通常ノ違背
或ハ所犯ヲ聯邦刑法中ニ省却スル_一ヲ得_一且
萬國公法ニ係ル諸規則ハ重_一モニ聯邦ニ於テ知

内外國ノ
辨

本國臣民
ヲ外國ハ
引渡スラ
許サス

ラサル可ラサルトノ趣意ニ出テタルナリ
上ノ規則ハ納税伐木戰場警視及ヒ漁獵ニ関ス
ル違令ノ罰ニツキ千八百六十六年六月廿七日
發行ノ佛蘭西法ニ從ヒ各五ニ通用ス可キ法令
或ハ條約アルモノニ於テ之ヲ施行スヘシトス
第五條 一國偏有ノ刑法書ニ於テ不用トス
ハキ内外國區別ノ條目ハ聯邦各國從來ノ法典
ニ對シ疑惑ヲ生セシテ之ヲ舉ゲタリ
第六條 本國臣民ヲ外國裁判ニ引渡ス可ラ
サルノ條理ハ萬國法及ヒ各國法ニ在テモ學問
上并ニ實施上之ヲ舉用セサル者尠ナレ
千八百
三十八年
威爾遜
論第一冊
第四百
三十一
頁
又近世
司法ノ道
ヲ堅固ニ
セ

ニカ為メ各國政府ニ於テ取結タル條約ニハ大
抵上ノ事件ヲ明許シ若クハ默許セサルヲノ十
シ例ハ千八百五十二年六月十六日ノ普漏生
亞米里加條約ヲ千八百六十八年二月二十二
日ノ議定ニ由テ北獨乙聯邦ニ擴用スルカ如シ
千八百六十八年聯邦政事誌第百十四葉裏而メ
諸ノ立法官ニ於テ普漏生ノ如ク明ニ此條ヲ揭
ケサルモノハ本國ノ國法并ニ萬國公法ノ道理
ニ從ヒ言フ須タスシテ瞭然タルヲ以テナリ
然レモ北獨乙聯邦刑法各ニ於テ更ニ此條ヲ舉
クルノ緣由ハ近世他國ニ於ルノ例規ニ倣ヒ即
チ千八百六十七年ノ埃斯太利亞刑法草案第八
條及ヒ千八百六十八年ノ伊太利亞刑法草案第

普通刑法
ヲ兵負ニ
適スル

十節第一條ノ例ニ準ビ聯邦内ニ於テハ決シテ
内國人ヲ外國ニ引渡スルヲ許サズ是レ各北獨
逸人ヲレテ聯邦人民タルノ恩ヲ確認セメシカ
為ノナリ

聯邦ノ一國他ノ一國ニ其國ノ臣民ヲ引渡ス可
キヤ否ヤニ就テ生ズ可キ疑惑ハ千八百六十九
年六月二十一日尅ノ聯邦各國行法上互ニ應援
ス可キヲ論スル聯邦法令ニ從ヒ今後自ラ消
却ス可シ 其他ノ例月ハ聯邦刑事裁判法ニ屬
スルモノトス

第七條 草案第七條ニ於テ北獨乙兵負ニ聯邦
普通刑法ヲ適用スルノ限ヲ立テタルモノハ現
ニ聯邦内ニ擴用スル千八百四十五年四月三日

償金權

頒行普漏生軍律書ノ第一條第二條及ビ千八百
五十二年四月十五日ノ法令ニ依ル千八百六十九年十月

第二十九日布告聯邦政事誌
兵負ノ輕重ハ軍律各附録及ビ普漏生陸海軍兵
員等級ノ廣告千八百六十七年聯邦政事誌第百
四十二葉ニ於テ逐一之ヲ舉ク

第八條 草案第八條ハ他ノ獨乙國刑法各即チ
千八百三十九年三月一日頒行ウユルラシブル
グ「刑法書第七十八節千八百五十八年七月三日
頒行「オルデンブルグ」刑法各第五節及ビ千八百
六十三年八月二十四日頒行「ユーベツキ」刑法
書第五條ト一致シ刑罰ノ分限ヲ定ム
本條ハ民事兩裁判官ノ審判上ニ関スル分限

及以被告人免罪トナル片被傷人ノ償金請求ノ
權限ハ裁判法ニ屬スルヲ以テ之ヲ論セス

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

北獨乙
聯邦

刑法草案辨由 第一篇 二

司
長
官

第一篇 重罪輕罪ノ処刑

○第一章

北獨逸聯邦刑法草案ノ刑例ニハ次ノ種類アリ

一 死刑

二 徒刑

三 城寨禁

四 禁獄

五 禁錮

六 教育場成ハ改良院ニ入ル、

七 追加改良禁ノ為メニ工場ニ入ル、

八 罰金

九 没収

十 民權剥奪

十一 奉職ヲ禁スル

十二 警察監護

十三 聯邦外追放

是レ千八百五十一年四月十四日頒行普漏生刑
 法書ト其體裁ヲ同ウセリ○草案ニ於テモ諸人
 ノ稱讚スル如ク版千八百五十一年「バル」氏普漏生刑
 法罰科第「冊」第「四」府「表」以下「〇」千「八」百「五」十「八」
 次「國」會「銀」事「補」遺「刑」法「書」原「論」第「百」六「葉」表「日」頒「行」
 獨「乙」刑「法」論「第」百「二」十「二」葉「裏」以下「子」ル「氏」此「刑」例
 ハ單純寬宥ニシテ眞ニ正當ヲ得タルヲ以テ之
 ヲ収用セサル可ラサルモノト為シタリ
 違令ニ該ル繫囚罰ニ別名ヲ命シタル「第一條」
 ノ外北獨乙工業條例ニ照シ技術或ハ工業ヲ禁

スルノ罰ヲ廢シタル「ハ」總テ普漏生刑法書ト
 相異ナレリ
 近世ノ罰類殊ニ諸ノ北獨乙刑法各ニ於テ用フ
 ル呵責ハ之ヲ草案中ニ編入セス○此刑ハ極メ
 テ輕キ所犯ニハ適當ナリトスル法律家六十八百
 年ハ刑法第十府出版」卷第百七葉表以下」亦少カラスト雖
 氏之ヲ収用セサル所以ノモノハ此刑諸多ノ犯
 人ニ取り功ヲ奏スル「ト」ナク又他ノ犯人ニ在テ
 ハ徒ニ慙愧シ却テ懶惰心ヲ生スルノ恐レアル
 カ故ナリ
 重輕罪ニ該ル刑例ノ内死刑、徒刑、城寨禁、禁獄、罰
 金ヲ本刑トシ自余ノ刑類ヲ屬刑トス屬刑ハ專
 ラニ之ヲ科スル「ト」得ス必ス本刑ニ附屬ス可

シ上ノ本刑ヲ各重軽罪ニ該ルハ即予次表ノ如

重軽罪本刑ノ條例表

第一 死刑

一 聯邦君主ニ對スル謀反 草案第六十七條

二 聯邦君主ニ對スル所為ノ凌辱 一狀情アリ至ハ

草案第八十條

三 謀殺 八〇草案第五條

第二 終身徒刑

一 聯邦ニ對スル反逆 〇情狀アリハ五年草案第

六條

二 聯邦ニ對シ兵ヲ動カス者 〇草案第七

三 敵軍ニ下リ聯邦ニ對シ兵器ヲ用フル者 〇草

草案第七

四 敵勢ヲ助クルノ重キ者 七〇草案第六條

五 強姦ニ由テ過失殺アル者 五〇草案第三條

六 幼女姦ニ由テ過失殺アル者 五〇草案第四條

七 重軽罪ヲ遂ケシカ為メニ故殺ヲナス者 〇草

草案第八條

八 尊族親ノ故殺 八〇草案第九條

九 妊婦ニ問ハスシテ墮胎セシメ或ハ受諾ナ

クシテ脱胎セシムルニ由リ過テ妊婦ヲ死ニ

致ス者 九〇草案第二條

十 故ラニ健康ニ害アル物品ヲ用ヒ過テ被害

人ヲ死ニ致ス者 二〇草案第一條

十一 強盜ノ重キ者 百〇草案第九條

十二 持兇器劫迫 百〇草案第二條

十三 放火ニ由テ過失殺アル者 八〇草案第七條 二百

十四 故ラニ水害ヲ起シ過失殺アル者 第〇草案百

十五 故ラニ汽車ノ運送ヲ害シ過失殺アル者 一九條

十六 故ラニ航海ノ諸標ヲ毀損スルニ由リ過失殺アル者 三〇草案第

十七 故ラニ船舶ヲ衝激セシムルニ由リ過失殺アル者 三〇草案第

十八 毒物タルヲ知テ之ヲ飲料ニ混入スルニ由リ過失殺アル者 三〇草案第

十九 毒物タルヲ知テ之ヲ飲料ニ混入スルニ由リ過失殺アル者 三〇草案第

二十 毒物タルヲ知テ之ヲ飲料ニ混入スルニ由リ過失殺アル者 三〇草案第

二十一 毒物タルヲ知テ之ヲ飲料ニ混入スルニ由リ過失殺アル者 三〇草案第

二十二 毒物タルヲ知テ之ヲ飲料ニ混入スルニ由リ過失殺アル者 三〇草案第

二十三 毒物タルヲ知テ之ヲ飲料ニ混入スルニ由リ過失殺アル者 三〇草案第

第三 有期徒刑

(一) 十五年以下

一 故ラニ公立電信局ノ妨碍ヲナスニ由リ過

二 水導管ヲ毀損スルニ由リ過失殺アル者 百〇草案第九十八條

乙 五年以上

一 二人以上反逆ヲ謀ル者 至情狀十年 城寨禁

二 外國ニ通シ謀反ヲ企ツル者 二〇情狀至十年

三 外國政府ヲ煽動シ聯邦ニ對シ兵ヲ起サシ

城寨禁

七 草案第十條

二 外國ニ通シ謀反ヲ企ツル者 二〇情狀至十年

三 外國政府ヲ煽動シ聯邦ニ對シ兵ヲ起サシ

ル者七〇草案第

四立法議會ニ對スル暴行八〇草案第

五誣告ノ重キ者終身保証ノ民權ヲ剥奪シ并ニ

五〇草案第百三十三條

六故殺八〇草案第百

七暴動或ハ折傷ニ由テ過失殺アル者一〇八情狀月

乃至九十九年禁獄ニ百一草案

八毒害ニ由リ重折傷アル者二〇百二草案第

九強盜ノ重キ者百〇二〇草案第

十劫迫ノ強盜ニ擬スルキ者百〇三〇草案第

十一故ラニ生命ニ関スル水害ヲ起ス者第〇二草案

十二故ラニ氣車ノ運送ヲ害スルニ由リ重傷ア

ル者百〇九草案第

十三故ラニ航海諸標ヲ毀損スル等ニ由テ船舶

ノ衝激ヲ致ス者三〇百三草案第

十四故ラニ船舶ヲ衝激セシムル者百〇四草案第

十五官吏故意アリテ猥リニ人ヲ繫囚スル罪ノ

重キ者百〇二草案第

一國王ノ妃若クハ太子ニ對スル暴行一〇八情狀

六〇草案第百三十三條

(丁)二年以上

一國ノ機密或ハ城寨ノ内形ヲ通告スル者草

十草案第

二聯邦君主ニ對スル暴行ノ輕キ者一〇八情狀

一 強盜五。草案第百
 二 強盜五。草案第百
 三 贖金。草案第百三十三。十月乃至五年。禁獄。
 四 妊婦ニ問ハス若クハ受諾ナクシテ脱胎
 五 竊盜再犯ノ重キ者至。五年禁獄。ハ。草案第
 六 藏匿再犯ノ重キ者至。五年禁獄。ハ。草案第
 七 官務ニ係ル暴挙ノ重キ者至。三月禁獄。至。五年
 八 強盜五。草案第百
 九 強盜五。草案第百
 十 四歳未満ノ幼女ニ姦スル者ハ。情狀
 十一月以上
 十二月以上
 十三 強盜五。草案第百
 十四 強盜五。草案第百
 十五 強盜五。草案第百

一 乃至五年禁獄。草案
 二 乃至五年禁獄。草案
 三 賣買セシカ為メ等ニテ騙欺或ハ強カラ
 四 用ヒテ人ヲ搶去スル者。草案第
 五 強盜五。草案第
 六 劫迫ノ重キ者。草案第。剽奪ヲ魚ス。條。
 七 密ニ藏匿ヲ業トスル者。草案第。條。
 八 有心故造ノ破産。五年禁獄。ハ。草案。二月。乃至
 九 人アルノ場所ニ放火スル者。草案第。條。
 十 他人ノ財産ニ損害アル水害ヲ起ス者
 十一 裁判官或ハ陪審人ノ財ヲ受クル者并ニ
 十二 同上ノ人ニ財ヲ與フル者。草案第。百。十。

十一 官吏故意アリテ猥リニ人ヲ繫囚スル罪
ノ重キ者百〇草案第一條

十二 官吏故ラニ無罪人ヲ追糺スル者第〇草案
百四二條

十三 官吏罪人ニ罰ヲ受シムルニ故ラニ宣告
ノ刑ヲ以テセサル者ニ〇草案第百三

(二) 十年以下
(甲) 三年以上

一 従前敵軍ニ事ヘテ聯邦ニ對シ兵器ヲ用
フル者城寨禁狀〇草案第七年乃至五年

一 演舌或ハ書類ヲ以テ公然ニ謀反ヲ勸諭
(乙) 一年以上

二 戦時ニ敵ヲ助テ聯邦ニ對シ謀反スル者
スル者城寨禁狀〇草案第七年乃至五年

三 友國ニ對スル國事犯ヲ至情狀ニ成塞禁〇
十草案第八條

四 暴動一揆ノ首年〇情狀〇草案第六月乃至五
十草案第一條

五 囚虜ノ黨ヲ結ンテ監吏ニ對シ暴動ヲナ
ス者百〇草案第一條

六 林吏ヲ折傷スル者至〇情狀ニ成塞禁〇八
百二條

七 誣告十〇民權ヲ剥奪シ草案終身保証人
百三十五條

八 欲急ヲ以テ人ノ籍ヲ移換シ或ハ之ヲ竊

取スル者四〇草案第百

九 私生児ノ謀殺年〇禁情獄〇草案第百九乃至五

十 人ヲ擯逐スルニ由リ過失殺アル者案〇草案百

十一 故ラニ人ノ身体ヲ折傷スルニ由リ篤疾三九條

トナス者獄〇情草案第百八十月八乃至五年一

十二 他人ノ食料ニ毒物ヲ混用スル者第〇草案百

十三 卑業ニ陥レンカ為メニ欺騙或ハ強カク降ニ

用ヒテ人ヲ搶去スル者ニ〇草案第百六條

十四 誘姦或ハ結婚セシカ為メニ騙欺或ハ強

カラ用ヒテ婦女ヲ搶去スル者ニ〇草案第百八條

十五 猥リニ人繫囚スル罪ノ重キ者ニ〇草案第百十一條

十六 竊盗ノ重キ者年〇禁情獄〇草案第百九乃至五

十七 竊盗再犯ノ輕キ者至〇五年草案第百六條

十八 藏匿ノ重キ者年〇禁情獄〇草案第百三乃至五

十九 藏匿再犯ノ輕キ者至〇五年草案第百三乃至五

二十 有心故造ノ破産ヲ助カスル者〇情草案第百三乃至五

廿一 徒黨ヲ結ビテ他人ノ財産ヲ掠奪スル者

禁情獄〇草案第百八十月八乃至五年一

廿二 他人所有ノ船舶等ニ放火スル罪ノ輕キ

者六〇草案第九十條

廿三 火難請合ノ財産ヲ有心故造ニ焼失スル

者八〇草案第九十條

廿四 故ヲニ瀛車ノ運送ヲ害スル者ニ〇草案第十

條

廿五 故ヲニ公立傳信局ノ妨碍ヲナスニ由リ

重折傷或ハ健康ニ害アルヲ致ス者〇

草案第九十條

廿六 水導管ヲ破毀スルニ由リ重折傷ヲ致ス

者三〇草案第九

廿七 航海ノ諸標ヲ破毀スル者三〇草案第九

廿八 水難請合ノ船舶ヲ有心故造ニ衝激セシ

十五 者三〇草案第九

廿九 飲料ニ毒物ヲ混入スル者三〇草案第九

三十 官吏官物ヲ冒認スル罪ノ重キ者三〇草案

第九十條

(三) 五年以下

一年以上

一 聯邦君主ノ妃或ハ太子等ニ對スル暴行

ノ輕キ者城寨禁獄〇草案第六月乃至五年

二 立法議會ノ議員ニ對シ威逼脅嚇スル者

十〇草案第八

三 船長ニ迫ル水夫徒黨ノ首百〇草案第

四 故ヲニ他人ヲ教誘シ誣告ヲナシシムル

者三〇草案第百

五 二重ノ結婚禁獄〇草案第六月乃至五年

六 子ニ姦スル親百〇草案第十條

七 當主ニ姦スル後見人或ハ職務上關係アル女子ニ姦スル官吏乃〇錯狀五年禁獄六〇草案第百五十一條

八 誑誘シテ姦淫ヲ行フ者五〇草案第百五條

九 媒合容止ノ重キ者草案民權百五十七條

十 脱胎セシムル者三〇情狀禁獄〇草案第百九十條

十一 折傷併死ニ依リ過失殺或ハ過失重傷アル者乃〇情狀五年過失重傷ニ殺於テハ三月至五年禁獄〇草案第百一十條

十二 劫迫ノ重キ者草案民權百三十一條

十三 官吏ノ財ヲ受クル者乃〇情狀五年禁獄〇草案

十四 官吏等不正ノ受理ヲナス者百〇草案第三十二條

十五 二重婚ナルヲ知テ之ヲ許諾スル僧官或ハ戸籍吏百〇草案第三十三條

十六 拷問ヲ用フル官吏百〇草案第三十三條

十七 故ラニ犯罪人ヲ追糺セサル者或ハ宣告ノ刑ヲ受ケシメサル者日〇情狀二年禁獄二〇草案第三十五條

十八 故ラニ因虜ヲ遁逃セシムル官吏乃〇情狀草案第百五十二條

十九 法官等徇私聽囑ノ重キ者百〇草案第四十三條

(四) 三年以下
一年以上

一 國事犯ヲ企ツル者至○三年杖城塞禁六月案乃
三第條十

第四徒刑罰金

(一) 一年乃至十年ノ徒刑魚五十タ

一 公昏偽造ノ重キ者五○年情禁杖獄アルハ案第二百
百四十五條二

(二) 一年乃至十年ノ徒刑魚五十タ

一 官吏ノ公昏ヲ偽造スル者百○案第七第三條

一 公書偽造禁情杖獄アルハ案第二百四十三條
一 公書偽造禁情杖獄アルハ案第二百四十三條

第五

(一) 五年以上

(甲) 一年以上

一 兵役ヲ免レント欲シ故ラニ身ヲ殘ニ致
ス者二○案第百五條

二 自己ノ財産ヲ守護セシカ為メニ故ラニ
水害ヲ起ス者百○案第三十三條

(乙) 六月以上

一 揆徒黨九○案第六十六條

二 因虜暴動ノ輕キ者百○案第一百一條

三 贖金ノ輕キ者條○案第百三十三條

四 媒合容止メ輕キ者五○案第七十七條
過失ナクシテ暴行ヲ被ルニヨリ激怒シ

テ故殺ヲナス者八十草條第百

六 少年ヲ騙欺シ或ハ強カラテ用ヒテ搶去ス

ル者二〇草條第

七 戰時ニ際シ約定ノ諸軍品ヲ故ラニ官廳

ニ納メサル者三〇草條第

(丙) 三月以上

一 林吏ニ對スル暴行百〇二草條第

二 船長ニ迫ル水夫徒黨百〇八草條第

三 兵役ヲ免レシト欲シ欺詐ヲ用フル者草

業第六百二

四 讒詐四〇十草條第

五 幼穉或ハ寄托ナキ人ヲ擯逐スル者業〇第

三百九十三條

六 尊族親ニ對スル暴行或ハ折傷九〇十草條第

七 誘姦或ハ結婚ヲ和約シ兩親或ハ後見人

ノ承諾ヲ得スレテ未嫁ノ女ヲ搶去スル

八 官用紙或ハ印紙ノ類ヲ偽造スル者業〇第

十二百七十四條

九 密ニ狩獵ヲ業トスル者百〇七草條第

十 水導管ノ類ヲ破毀シ人命ノ危難ヲ致ス

者三〇草條第

十一 職務ニ関スル暴挙至〇五情狀

罰金〇ル草條第三十夕レ條

十二 官吏故ラニ人ヲ繫囚スル者百〇二草條第

十三 歳額ヲ私スル者百〇三草條第

十四 妾ニ歳出ノ額ヲ減入セシ者三〇草案第三百

十五 驛遞吏妾ニ郵昏ヲ開封シ或ハ掠取スル者百〇草案第百三

十六 電信吏音信ヲ詐リ傳ヘ或ハ密ニ他人ニ通スル者百〇草案第百三

十七 法官等ノ徇私聽囑百〇草案第百三

(丁)二月以上

一 船長ニ迫ル水夫徒黨百〇草案第百八

(戊)一月以上

一 故ラニ官ノ書類ヲ埋没スル者百〇草案第百十

二 財産破損ノ重キ者百〇草案第百十

(己)一周以上

一 竊盜百〇草案第百七

二 官吏ノ官物ヲ竊取スル者百〇草案第百八

(庚)一日以上

一 他人ノ國事犯等アルヲ知ラ告発セサシ者四〇草案第百五

二 官令ヲ発セシメント欲シ官廳或ハ官吏ニ對シ脅嚇或ハ強カヲ用フル者九〇草案第百九

三 官務或ハ職業ノ怠惰ニ由リ過失殺アル者九〇草案第百四

四 妾ニ人ヲ繫囚スル者百〇草案第百一

五 劫迫百〇草案第百一

六 藏匿ノ輕キ者三〇草案第百三

七 故ラニ約信ニ背ク者四〇草案第百四

八 官吏等ニ財ヲ與フル者一〇。情狀アルハ至
業第三五。罰金〇。草

(二) 三年以下

(甲) 三月以上

一 選舉ノ官吏公選ノ成績ヲ猥リニ捏結ス
ル者九〇。第一〇條

二 船長ニ抗スル水夫徒黨ノ首百〇。第六條

三 北獨乙人ヲ外國兵役ニ誘引スル者案〇。第二條

(乙) 二月以上

一 傳染諸病防禦ノ制ヲ破ルニ由リ過失殺
アル者三〇。第八條

(丙) 一月以上

一 過テ汽車ノ運送ヲ妨クルニ由リ過失殺
アル者九〇。第十條

二 故テ公立電信局ヲ妨害スル者案〇。第二條

三 過テ公立電信局ヲ妨害スルニ由リ過失
殺アル者百〇。第九條

四 職務ヲ惰ルニ由テ公立電信局ノ妨害ヲ
致ス者百〇。第九條

(丁) 一周以上

一 立法會議ノ議決及ヒ官廳ノ吏員等ニ對
スル暴行或ハ故折傷九〇。第七條

(戊) 一日以上

一 故テニ因虜ヲ放解スル者九〇。第九條

二 常人ニシテ故ヲニ因虜ヲ遁亡セシムル者第百章案

三 神ヲ褻瀆スル者四〇章案第百

四 神祭禮拜ニ妨害ヲナス者四〇章案第百

五 欲念ナクシテ妄ニ人ノ籍ヲ移換シ或ハ

竊取スル者四〇章案第百

六 人命ヲ過リ或ハ重傷ヲ致シタル政闘徒

犯ノ輕キ者ニ百章案第

七 貸貸ニ出シタル財産ヲ妄ニ収戻スル者七〇章案第百

八 財産破損百〇章案第

(三)二年以下

(甲)三月以上

一 官廳ニ法令ヲ障礙セシムル欲スル陰謀ノ

首若クハ主務者等百〇章案第

二 煽動シテ二人闘ヲ起サシムル者百〇章案

條十四

(乙)六周以上

一 兵卒ヲ煽動シテ不従順ナラシムル者百〇章案第

條十三

(丙)一月以上

一 公選ノ投票ヲ私セシカ為メ金錢ヲ贈ル

者或ハ受クル者九〇章案第

二 長官ニ不従順ナル水夫徒黨ノ従百〇章案

條

三 長官ニ抗スル水夫百〇章案第

四 教誘シテ人ヲ外國ニ從轉セシムル者草

十案第七條

五 家畜流行病防禦ノ制ヲ破フルニ由リ家

畜流行病ヲ生セシムル者三百九條

(丁) 一日以上

一 選舉ノ官吏ニ非スシテ公選ノ成績ヲ擅

結スル者九十章案第

二 妄ニ持兵器ノ徒ヲ募ル者百九案第

三 官吏ニ對スル凌辱ノ情狀以下罰金五百

十案第

四 聯邦外追放ノ外國人ヲ復ニ再入スル者

二十章案第

五 公ノ盟約ヲ破者百四案第

六 死体盜或ハ墳墓破毀百四案第

七 血族姦ヲ犯シタル卑族百五案第

八 兄弟姉妹ノ血族百五案第

九 鷄姦及ヒ姦獸百五案第

十 不義犯ニ由テ公然人ヲ辱カシムル者草

十案第

十一 過失殺百九案第

十二 竊盜百十案第

十三 竊盜百十案第

十四 故造破産ノ輕キ者百五案第

十五 傳染諸病防禦ノ制ヲ破ル者三百八案第

十六 約定ノ軍用諸品ヲ過テ官廳ニ納メサル

者三百十案第

(四) 一年半以下

(甲) 一月以上

一 醫師ニシテ診候ヲ偽リ醫業ヲ作ル者第百〇

案第百五十三條

(乙) 一日以上

一 公然ニ人ヲ讒毀シ或ハ同様ノ書類ヲ廣

布スル者罰金〇ア草案第百六十六條以下

(五) 一年以上

(甲) 一月以上

一 陰謀ノ首若クハ主務者等第百十草案第

二 官廳ノ法令ヲ障碍セシト欲スル陰謀ノ

ニ 從第百十草案第

三 盟約ニ准ス可キ約ヲ偽リ結フ者第百三

十條

四 失火ニ由テ過失殺アル者第百八十九條第

九十

五 過テ水害ヲ起シ過失殺アル者第百九十四

條

六 過テ水導管ノ類ヲ破毀スルニ由リ過失

殺アル者第百九十二條

七 過テ航海ノ諸標ヲ破毀スルニ由リ過失

殺アル者第百九十三條

八 過テ船舶ヲ衝激スルニ由リ過失殺アル

者第百九十四條

九 過テ毒物ヲ飲料ニ混入スルニ由リ過失

殺アル者第百九十六條

(乙)一周以上
一 黨ヲ結シテ人ノ住居ノ障碍ヲナス者草
案第百
十條

(丙)一日以上

一 長官ニ不從順ナル水夫百〇草案第
百五條

二 妄ニ持兵器ノ徒ヲ募ル徒百〇草案第
百九條

三 官吏ノ職務ヲ僭冒スル者百〇草案第
百十六條

四 兵負ノ遁亡スルヲ知テ告発セサル者草
案第百
二十四條

五 教誘シテ盟約ニ准人可キ約ヲ偽リ結ハ
シムル者三〇草案第
百九條

六 不注意ニ出タル誣告四〇草案第
百一十條

七 誘姦五〇草案第
百九條

八 讒毀ノ輕キ者乃〇情状
百アタルハ一ルタ贖罪〇ル

九 脅迫シテ事ヲ行ハシムル者百〇草案第
百一十條

十 水火ノ災害ヲ起サン_一ヲ以テ人ヲ脅迫
スル者百〇草案第
百三條

十一 遺失物ヲ竊盜スル者百〇草案第
百十四條

十二 典物ヲ私用スル者二〇草案第
百四條

十三 名ヲ假リテ医証ヲ偽造スル者二〇草案第
百五條

十四 偽造ノ医証ヲ用フル者百〇草案第
百五條

十五 財主ノ利ヲ私スル者九〇草案第
百六十六條

十六 官廳ヨリ貸借ニ受ケタル物品等ヲ妄ニ

埋没スル者第百案

十七 給料ヲ受取ラ遁亡スル水夫百七案 第八條

十八 過テ氣車運送ノ危難ヲ起ス者二百案 第九條

六條

十九 家畜流行病防禦ノ制ヲ破ル者三百案 第九條

(六) 半年以下

一月以上

一 陰謀ノ徒百十案 第一條

二 官署ノ緘印ヲ破開シ或ハ毀損スル者百案

案第百

三 警察監護ニ坐シテ其規則ヲ破ル者案第百

九百二十

四 密姦四案 第九條

五 密賣淫五案 第六條

六 失火九案 第九十條

七 過テ水害ヲ起ス者百九案 第四條

八 過テ公立ノ電信局ヲ妨害スル者第百案

九條

九 過テ水導管ノ類ヲ破毀シ人命危難ヲ致

ス者三百案 第一條

十 過テ航海ノ諸標ヲ破毀スル者三百案 第三條

十一 過テ船舶ヲ衝激スル者三百案 第四條

十二 過テ飲料ニ毒物ヲ混スル者三百案 第六條

(七) 三月以下

一月以上

一 林吏或ハ狩獵監吏ニ抗拒スル者第百二條

二 株式會社ヨリ各株主ニ分配スルキ益金ヲ故アリ淹滞シテ之ヲ告知スルヲ怠リタル者五〇章案第百

(八)二月以下

一日以上

一 陪審等ニシテ欺テ免罪状ヲ奉クル者〇章案第百二

第六 禁獄兼罰金

(一)一周乃至五年ノ獄兼二十〇日ノ

罰金

一 詐偽ノ重キ者百〇章案第百九

(二)一日乃至五年ノ禁獄兼一〇日ノ

罰金

一 詐偽〇情狀〇章案第百〇日ノ以下

二 欲念アリテ約信ヲ破ル者百〇章案第百二

三 巧ニ年少者ニ負債ノ證ヲ出サシムル者〇情狀第百六十三

案〇第百六十三〇日ノ以下罰金〇章

(三)一月乃至二年ノ禁獄兼百〇日ノ

罰金

一 陰ニ賭博ヲ業トスル者百〇章案第百六

第七 禁獄若クハ城塞禁

一 六月乃至五年ノ禁獄若クハ一日

乃至二年ノ城塞禁

一 強カラ用ヒ或ハ哄嚇シテ公撰ノ權ヲ妨

害スル者八〇章案第

(二)二月乃至五年ノ禁獄若クハ一日

一 乃至二年ノ城寨禁
聯邦君主ニ對スル凌辱八〇章案第

一 乃至一年ノ城寨禁
三一月乃至三年ノ禁獄若クハ一日

一 聯邦君主ノ妃或ハ太子等ニ對スル凌辱
八〇章案第

一 乃至半年ノ城寨禁
四一月乃至二年ノ禁獄若クハ一日

一 外國ノ君主或ハ攝政ニ對スル凌辱案〇章第
五八條

一 乃至一年ノ城寨禁
五一日乃至一年ノ禁獄若クハ一日

一 外國公使ニ對スル凌辱八〇章案第
六條

二 過テ刑名宣告ヲ受サレハ刑スル者
二〇章案第

一 禁獄若クハ罰金
八禁獄若クハ一日

一 暴挙或ハ故意折傷九〇章案第
二一日乃至二年ノ禁獄若クハ一日

一 官吏ノ職ヲ行フ者ニ對シ強カヲ用ヒ或
ハ哄嚇ヲ加フル者九〇章案第

一 密ニ危險ナル荷物ヲ積ミ入ル、ニ由テ
船中ニ災害ヲ生セシムル者百〇章案第

一 禁獄若クハ一日
三一日乃至二年ノ禁獄若クハ一日

一 法度ニ違背セシトテ公然ト勸諭スル者
十〇草案第九

二 尊爵ノ記号等ヲ破毀スル者
九〇草案第八

三 勸諭シテ民間ニ不知ヲ生セシムル者
草案第十

四 法令ヲ誹謗スル者
百〇草案第十

一 兵役ヲ免レント欲シテ出奔スル者若クハ
歸國セサル者ニ
十草案第九

二 五〇一日乃至一年ノ禁獄若クハ一タ
ルノ罰金

三 少年ノ人ニ財産ヲ出スヲ約定セシム
ル者
百〇草案第九

四 六〇一日乃至一年ノ禁獄若クハ一タ
ルノ罰金

五 構造法ニ背キタル建築ニ由テ他人ニ危
難ヲ被ラシムル者ニ
百〇草案第九

六 他人ノ財産ヲ損害スル者
百〇草案第九

七 一〇一日乃至一年ノ禁獄若クハ一タ
ルノ罰金

八 重軽罪人ヲ恤助スル者
十草案第九

九 一〇一日乃至一年ノ禁獄若クハ一タ
ルノ罰金

一〇 過失傷ニ
百〇草案第九

二 官吏貪テ自己ノ給金等ヲ過分ニ收斂ス
ル者百〇三章案第三
 (九) 一日乃至半年ノ禁獄若クハ五十日
ノ罰金
 他商ノ記号等ヲ偽用スル者百〇六章案第九
 (十) 一日乃至半年ノ禁獄若クハ一〇日
ノ罰金
 書類圖画等ヲ用ヒテ人ヲ羞耻セシムル
者百〇七章案第一
 官ヨリ入札拂下等ヲナスニ付テ同職ノ
 加入ヲ妨障スル者百〇七章案第二
 (十一) 一日乃至半年ノ禁獄若クハ一〇日
ノ罰金

一 公然揭示ノ廣告ノ剥取り或ハ破損スル
者百〇九章案第百
 羞耻ス可キノ事ヲ廣布スル者百〇六章案第一
 欲念ナクシテ鑑札等ヲ偽造スル者百〇七章案
第三
 欲念ナクシテ官ノ誌類ニ偽詐ヲ登録ス
ル者百〇五章案第一
 五 免許ナクシテ狩獵ヲナスノ重キ者百〇四章
案第七
 六 官吏受財百〇十章案第三
 七 官吏過テ囚虜ヲ逃亡セシムル者百〇三章案
第六
 (十二) 一日乃至三月ノ禁獄若クハ一〇日

一 集合ヲナシ三回ノ命ヲ歴テ猶ホ解散セ

サル者九〇草案第七條

二 妄ニ他人ノ私事ヲ発露スル者二〇草案第八十條

(十三)一日乃至三月ノ禁獄若クハ一月ノ罰金

一 常人過テ因虜ヲ逃亡セシムル者第〇草案第一條

二 猥ニ兵衣或ハ賞牌等ヲ服用スル者第〇草案第二條

三 贋金ナルヲ知ラズシテ之ヲ領受シ右

其然ルヲ知ルト雖正貨トシテ再々之ヲ使用スル者三〇草案第二條

四 猥ニ人ノ居住ヲ障碍スル者百〇草案第二條

五 猥ニ狩獵スル者百〇草案第三條

六 猥ニ他人ノ文書ヲ開緘スル者二〇草案第七十條

七 放職ノ缺道吏ヲ猥ニ在勤ビシムル者第〇草案第一條

八 再勤ヲ禁シタル鉄道吏ヲ再々使役スル

者等三〇草案第一條

九 僧官ニシテ移籍ノ證ヲ見ス結婚ノ式ヲ

行フ三犯ナル者百〇草案第八十條

(十四)一日乃至二月ノ禁獄若クハ一月ノ罰金

一 凌辱ノ輕キ者六〇草案第一條

二 官吏徠三人ノ居住ヲ障碍スル者 第三案百
三 條十

第九 城寨禁

(一) 十年以下

(甲) 三年以上

一 決死ノ二人闘ニ由テ對手ヲ殺ス者 案第
九百七十九

(乙) 三年以上

一 二人闘ニ由テ對手ヲ殺ス者 七〇
十案第百

(二) 五年以下

六 聚衆外人三月以上

一 二人闘七〇
十案第百

四 聚衆人(三) 三年以下

一 糾首者 一日以上

一 友國ニ對シ國事犯ヲ企ツル者 八〇
十案第

(四) 二年以下

一 決死ノ二人闘ヲ挑要スル者 并ニ同ク養

諾スル者 七〇
十案第百

(五) 半年以下

一日以上

一 持兇器二人闘ヲ挑要スル者 并ニ同ク養

諾スル者 七〇
十案第百

一 二人闘ヲ幫助スル者 七〇
十案第百

第十 罰金

(一) 五百以下

(甲)二十ダトレル以下

一 公會場ノ席主ニシテ博賭ヲ容領スル者

六十草案第百

(乙)一ダトレル以上

一 狼ニ抽籤會ヲ開ク者六十草案第百

(二)二百ダトレル以下

十ダトレル以上

一 既用ノ印紙等ヲ再用スル者百四十草案第百

(三)百ダトレル以下

一ダトレル以上

一 既用ノ印紙等ヲ再用スト金片自ラ其記

標ヲ消スニ非サル者百四十草案第百

一 僧官ニシテ移籍ノ證ヲ見ス結婚ノ式ヲ

行ノ者百十八草案第百

以上重軽罪ノ本刑ヲ普漏生刑法書八千八百六十

一ノ府出版ヨシハ葉表ヲ獨乙聯三邦刑法草案附録ヲ

見シト比較スル片ハ草案ハ普漏生刑法書ヨリ

モ刑目ヲノ尚ホ著シク單純ナラシメント勉メ

タルヲ觀ル可シ且草案ニ於テハ同類ノ犯罪

中最モ輕キ者ノ刑目ヲ省減シ情状ヲ斟酌シテ

之ヲ他ノ寛宥ナル刑ニ移スヲ得ルノ自由ヲ

増殖セシメタリ

第九條

草案ノ意ハ未ダ死刑ヲ廢セスシテ仍ホ之ヲ刑
例中ニ存セシメント欲スルニ在リ然レモ死
刑ニ処ス可キ重罪ノ條件ハ之ヲ減省セサル可
ラサルモノトセリ

即チ此獨乙聯邦刑法書中死刑ニ該ツ可キ重罪
ハ左ノ三件ニ過ク可ラサルヲ欲セリ(軍律及ヒ
戰時ニ際スル非常ノ死刑ハ此限ニアラス)

一 謀殺草案第五條

二 聯邦君主ヲ殺害シ或ハ捕囚シ或ハ位
ニ在ル能ハサラシメント欲スル及逆

草案第六

三 聯邦君主ニ對スル暴行草案第十條

此ニ因テ普漏生刑法書中死刑ニ誤ツルノ件カ
 ヲ州按ニ於テ終身徒刑ニ改メシモノ左ノ如シ
 一 叛逆ノ輕キ者普漏生刑法第三項第六十一條
 二 國事犯普漏生刑法第六十九條
 三 重罪ヲ犯サント欲シ故殺スル者普漏生刑法第七十條
 四 尊屬親ヲ故殺スル者普漏生刑法第七十條
 五 放火ニ由リ普漏生刑法第七十條
 六 水害ヲ起スニ由リ普漏生刑法第七十條
 七 鐵道或ハ電信機ヲ損害シ普漏生刑法第八十條
 八 航海ノ諸標ヲ破毀シ普漏生刑法第九十條
 九 或ハ船舶ヲ衝激シ或ハ飲普漏生刑法第九十條
 十 料商品等ニ毒物ヲ混入ス普漏生刑法第九十七條
 過失殺ア普漏生刑法第九十七條

蓋シ此變革ヲ要セシ所以ノ理ヲ論理上ニ推究
 スルハ其処ヲ得タリトセス
 死刑ノ存廢ニ就テハ衆論既ニ盡キ復タ言フ可
 キモノナシト雖モ存論家ハ毫モ屈撓ノ色ナク
 廢論家モ亦一步ヲ退クノ勢ナシ
 存論家ハ道德學ノ旨趣ヲ主張シ死刑ハ大德ヲ
 警戒スルニ決シテ欠ク可ラサルモノト云ヒ廢
 論家ハ殊ニ死刑ヲ以テ却テ道德學ノ本意ニ背
 ノモノト云フ
 存論家ハ死刑ヲ設クルハ耶蘓教則ヲ遵奉スル
 モノト云ヒ廢論家ハ亦同教法中ニ正シク反對

セシ規則アリト云ヒ又甲ハ死刑ハ道理ニ協フ
ノミナラス法理及ヒ法制上ニ必要ノ者タルヲ
論シ乙ハ死刑ハ正理ニ背キ且之ヲ免スルモ法
理及ヒ法制上ニ支障ナキヲ辨ス
道德學、教法、法理、法制上ノ諸則ハ之カ版著ヲ要
スルニ存廢兩論者ノ何レヲ問ハス其銳利ノ論
鋒ヲ等シク之ニ分典スルヨリ外ナカル可ク且
其論者ハ何レモ皆各國有名ノ大家タルハ今茲
ニ傍ヨリ死刑ノ利害ヲ断然判決シ其典ミ不可
キ党典ヲ定ムルハ是夕難シ
上ノ事件ヲ評決スルニハ史學ニ就テ穿鑿スル
ヲ良トス
故ニ此旨ノ附録ト為シ編纂シタル死刑論ニハ

死刑ノ利害ヲ推究シ其存廢ノ可否ヲ辨明スル
ヲ要務トセス之ヲ歷代ノ事蹟ニ照シ史上及ヒ
立法上ノ諸條件ヲ勉メテ多ク纂集シテ北獨乙
聯邦立法ノ為メ死刑存廢ノ議案ヲ決シ易カテ
シムルニ裨益アラシムルヲ本務トセリ
斯ノ理由ニ從ヒ草案ニ於テハ死刑ハ全ク免ス
可キニ非スト虽凡殊ニ其刑ノ條件ハ之ヲ減省
セサル可ラサルニ決セリ
方今北獨乙諸國ノ立法ニ於テハ猶ホ死刑ヲ存
スル者最モ多ク而メ此刑ニ諒ツ可キ重罪ノ條
件モ亦少ナキニ非ス
今若シ北獨乙聯邦刑法畧ニ断然死刑ヲ免棄シ
之カ為メ猶ホ死刑ヲ存スル上ノ各邦ヲシテ其

立法上ニ變革スル所アラシメント欲スルモ吏
 上全ク其例ナキニ非ス何トナレハ他國ニ於テ
 モ亦屢々死刑ヲ廢セシトアルニ因テナリ
 然レ氏此等ノ死刑ヲ廢止セシ(獨乙内及乙獨乙
 外ノ)諸國ハ其刑法史上ノ事蹟ヲ見ルニ即テ傾
 覆セシ前車ノ例タリ故ニ君シ具轍ヲ踏ミ卒然
 順次ヲ逐ハス死刑ヲ廢スル片ハ其法必ス(左ノ
 ク氏從來ノ例ニ依レハ常ニ)長持スル能ハス多
 クハ却テ退歩シ人民ノ心ニ浸深セシ法律ノ趣
 昔ヲ疑惑セシメ遂ニ害ヲ其國ノ司法ニ生スル
 ノ弊アルヲ致ス可シ
 如何ナル國土上虽モ立法ノ為メ試驗場トナル
 三堪テ可キモ以テナク殊ニ刑法ヲ如キハ最モ然

リトス況シヤ其刑法中最重ノ刑即チ死刑ナル
 故ニ此獨乙聯邦刑法草案ニ於テ史上ニ於テ
 穿鑿シ得タル教誨ニ從ヒ死刑可廢ノ説ハ之ヲ
 収用セサルヲ欲セリ
 然レ氏又史上ノ事蹟ヲ以テ思考スルニ死刑ニ
 処ス可キ重罪ノ限限ヲ狭小ナラシメス死ニ當
 ツ可キ所犯ノ條件ヲ減省セス以テ著シク司法
 ノ進步ヲ得タル所ノ國アルヲ觀ス
 獨乙ニ在テ第五世カール皇帝ノ律例書以降當
 今ノ諸刑法層ニ至ルマテ此一事ノ駸々進步セ
 シハ照々平トシテ見ルニ足ル可シ
 故ニ草案亦一層此改正ヲ進步セシメタリキ而

ノ此舉ハ全ク死刑ノ廃ス可キヲ欲スル人ノ志
望ト死刑ノ限界ヲ尚ラ狭小ナリトスル人ノ慨
歎トニ惑迷セラレスノ偏ニ此事件ニ就テ貴重
ス可キ規範即チ歷世司法盛衰ノ規範ニ從ヒシ
モノト謂フ可シ
然レ左草案ニ謀殺國事犯及ビ聯邦君主ニ對ス
ル暴行ノ三件ヲ死刑ニ定メシ故ヲ以テ死刑ハ
到底此三重罪ニ限ルモノトシ此三者ノ外ニ死
刑アル可ラスト言フカ如キハ却テ誤謬ニ屬ス
ルモノトス可シ
何トナレハ死刑ハ極メテ古法ト虽片此犯事ハ
必ス生命ニ關ス可ク彼ノ所行ハ敢テ死ニ処ス
可ラサルヲ確証不可キノ微末タ之レアラサレ

ハ死刑ヲ存セシト欲スル立法官ハ其限界ノ大
小ヲ制定スルニ專ラ目今ノ時勢ト其國民ノ法
律ヲ思フノ如何ト其心中ニ之ヲ承認スルノ如
何トニ由ラサルヲ得サルカ故ナリ
其時勢ノ如何ト國民ノ心中ニ法律ヲ承認スル
ノ如何トヲ定ムルモ亦確証ノ之ヲ明示ス可キ
モノナケレハ其察スル所ヲ以テ之ヲ推測セサ
ル可ラス故ニ立法官ノ所見ニ從ヒ同一ノ議問
ト虽片其決議ニ於テハ各々多少ノ差違ナキ能
ハサル可シ
故ニ今刑法ヲ草シ死刑ヲ取捨スルニ當リ若シ
立法官ニシテ獨乙人民ノ此刑ノ存廢ニ付キ其
心中ニ承認スル情狀如何ヲ識得ルヲ要セサル

モノトスルハ真ニ其當ラ得タルノ所為ニ非ル
 モノト謂フヘシ
 之ニ及シ草案ニ於テ死刑可存ノ決議ヲ得ルニ
 ハ先ツ大ニ其カラ勞シ以テ學問上ノ諸著述諸
 裁判所ノ報告類各立法會議ノ決議及ビ其他
 人民ノ論說ヲ見ル可キ畧類ニ就キ無意平心ニ
 國民ノ心中ニ兼認スル所ノ如何ヲ探知シ然ル
 後ニ之ヲ立法ノ參考ニ供セシモノト明言セサ
 ルヲ得ス
 全北獨乙聯邦ノ為メ普通ノ刑法ヲ編制スルニ
 ハ死刑存廢ニ就テ更ニ一箇ノ難事アリ即チ死
 刑ハ現ニ北獨乙ノ諸國ニ於テ一般ニ存スルモ
 ノニ非ス二三ノ聯邦設ヘハ「サクキセ」王國「オ」

「デ」ブルグ「オ」大谷國「ア」リ「シ」ハル「ト」府及ビ「ブル」
 「オ」共和府ノ如キハ已ニ死刑ヲ司法刑例中ヨ
 リ排棄シ以テ其國法ト為セシニ在リ
 北獨乙聯邦内ニ於テ故ラニ刑法ヲ統一ナラシ
 ムルカ為メ編纂スル刑法書ニ在テ刑例殊ニ其
 最重ノ刑即チ死刑ヲシテ各邦互ニ同シカラサ
 ラシムルハ實ニ憂フ可キ立法上ノ變則タレハ
 苟モ許容ス可ラサルモノトス
 故ニ草案ニハ此ノ如キ不同ヲ厭ヒ刑法統一ノ
 主旨ヲ重シレ死刑ノ限界ヲ狭小ナラシメ漸然
 之ヲ全聯邦中平等ニ施行セン「ト」ヲ欲シタリ
 第十條
 死刑ヲ行フニ如何ナル式ヲ以テス可キヤ草案

徒刑

ニハ之ヲ論スルヲ要セサルモノトセリ何トナ
レハ凡ソ刑ヲ行フノ式ハ律例ニ属セス別ニ処
刑式ノ之ヲ詳論スルアルカ故ナリ
死刑ニ処シタル罪人ノ遺体ヲ情願ニ因リ親属
ニ引渡シ祭式ヲ執行セス單一ニ之ヲ葬ムルヲ
許スノ法ハ一ハ親族ノ情状ヲ憐愍スルノ茲仁
ニ出ラ一ハ死刑人ヲ埋葬スルニ若シ之ヲ親族
ニ託セサレハ却テ死刑申渡ノ主意ニ戾ルニ至
ル可キ疎忽ニ陥ルノ弊アルヲ憂テ普漏生刑法
書中ヨリ採摘シタルモノナリ
第十一條及第十二條
草案ニハ徒刑ヲ以テ直ニ死刑ニ次キタル重罪
トナシ他刑ト判然別アラシクシテカ為ソ徒刑人

ハ囚場ニ在テ必ス皆場内ノ工役ニ就カシム可
キモノト為セリ
凡ソ徒刑場説置普通規則ハ草案ニ於テ之ヲ論
スルヲ要セサルモノトセリ何トナレハ方今此
場ノ制各邦大ニ相異ナルヲ以テ刑法統一ノ為
メ強テ普通ノ規則ヲ設クルニ却テ無益タルヲ
免レサルカ故ナリ
然レ氏各邦政府ハ漸次ニ同一ノ法ニ從ヒ囚場
ノ設制ト其監督トヲ等シクセントテ目下トシ
相共ニ之ヲ勉ム可キヲ緊要トスルハ今茲ニ明
言セサル可ラス何トナレハ同一ノ刑法昏ニ照
ラシ申渡シタル刑ハ聯邦内何レノ地ニ於テ之
ヲ受ケシムルニ其式ト形状トヲ異ニスルナリ

キニ至リ方ノテ刑法各上ノ統一ヲ真ニ實際ニ
及ホシタト謂フ可キカ故ナリ
其他草案ノ本條ニ於テハ有期徒刑ノ最重及ビ
最輕ノ期限ヲ指シタリ
普漏生刑法各ハ最輕ノ期限ヲ二年トシ最重ノ
期限ヲ二十年ト定メリ
同刑法各ノ公頒アルヤ直ニ此期限ハ最輕最重
共ニ其重キニ過クルノ駁論ヲ來セリ故ニ同國
政府モ己ニ千八百五十五年ノ刑法各再校ニ當
リ可カ及ハ最輕ノモノト雖其二年ノ期限ヲ
一年ニ減センコトヲ企テタリ
當時此說ノ採用セラレ、ニ至ラサルシ緣由ハ
内部事情アルニ非ス適々外部ニ已ラ得サル

以事件アルニ係ナリ千八百五十五年下議院ス
テノグララフニ誌第一冊第二十七葉表面以下及
ト第六冊第六十五葉裏面并ニ上議院同第一冊
第十六葉表面及ビ第二冊第四十二葉表面ヲ比
較ス可シ
茲ニ聯邦刑法ノ草案ヲ起スニ際シ斯ノ如キ外
部ノ事由ハ已ニ消除セシヲ以テ有期徒刑ノ最
輕ノ期限ヲ一年ニ減ス可キノ說ヲ草案ニ於テ
更ニ再起セリ
附録ト為シ編輯シタル此較表第六号ニ詳明ナ
ルカ如ク他國ニ於テハ此最輕ノ期限ヲ更ニ短
クセシ者アリト雖其草案ニハ斯ク降減スルコ
トヲ得ス一年ヲ以テ止ラサル可ラサルヲ信シタ

リ
又有期徒刑ノ最重ノ期限ニ就テ其期ノ十年ヲ
越ル片ハ十年以下ノ期ニ於テ現ニ罪人改良ノ
為ニ實効ヲ奏ス可キ經驗上ノ好事モ其好性ヲ
減却スルノミナラス屢々全ク消失スルヲアル
カ故ニ此期ヲ過コスハ刑ヲ受ケシムルノ趣意
ニ適ハス却テ之ニ度レリト為スノ論ヲ主張ス
ル有權ノ官僚少カラス且ツ此事件ハ多年實際
ニ刑ヲ施コス者モ亦親シク其確實ナルヲ經驗
シタル所ナリ
其他刑法學ニ就テ論スルニ凡ク刑ハ其重カラ
サルカ為メ後來遂ニ法制ニ害アリト不可キノ
理ナリ加之刑法者ニ在テ律例ノ酷ニ過クル片

ハ之ク為メ反動ヲ生シ易ク法度モ亦敢テ堅固
ナル能ハス却テ増々緩弛ニ陥ル可キカ故ニ草
案ニ於テハ普漏生刑法各ニ定メタル有期徒刑
ノ最重ノ期限二十年ナルモノヲ必ス減縮セリ
ル可テサルニ決シタリ
然レ氏十年ノ期限ヲ以テ十分ナリトスル確論
ト貴重ナル權官ノ格言トテ故テニ用ヒス又千
八百六十四年二月十六日頒行ノ「シユウ」テン國
刑法書ニ從ハスシテ此十年ノ期限ヲ草案ニ收
用セサルシ緣由ハ當時猶ホ北獨乙諸國ニ於テ
施行スル期限ヲ令頒ニ減縮スル片ハ之カ適度
ヲ失シ却テ危難ヲ生セントテ轉々恐レシカ故
ナリ

徒刑人ノ外役

上ノ自由ニ從ヒ草案ニハ決意シテ其中庸ヲ採
リ當今諸多ノ地ニ在テ有期徒刑ノ最重ノ期限
二十年ナルモノ及ヒ更ニ重キ三十年ナルモノ
ヲ十五年ニ減縮セシメタリキ
徒刑人ヲ徒場外ニ於テ工役スルヲ許スノ例ハ
普漏生法即チ千八百五十四年四月十一日ノ因
人ヲ因場外ニ於テ工役スルノ規則法令纂集第
七十二葉表面ヨリ引用セリ
所謂罪人ノ外役ナルモノハ普漏生ニ在テ已ニ
十五年来成立スルモノニシテ其成績頗ル取ル
可キモノアリ即チ第一ハ罪人ノ健康ノ為メニ
亘シク第二ハ罪人ノ放解セラレ郷ニ歸ルヲ後
戶外ニ出テ、家業ヲ當マサレ得サル者多キ

ニ長ク獄舎ノ一小室内ニ在テ工役セラル、片
ハ遂ニ常習トナリ後來或ハ戶外ノ營業ニ堪ユ
可ラサルニ至ルノ弊アルヲ防クニ足ル
其他此罪人ノ外役ハ満期ノ後罪人ヲ放解セン
カ為メ漸々之ヲ出行ニ慣レシムルノ趣意ニ出
テ且因場事務ノ為メ會計上ノ種々ノ利益ヲ欲
スルニ因ルモノトス
此利益ヲ計ルノ一事ハ其成績假令ヒ莫大ナラ
サルトモ凡ソ因場入費ノ為メニ公資ヨリ出ス
金額ハ非常ニ大ナルモノナレハ小利タリ氏補
益ノ一端ニ充ツ可キカ故ニ必ス之ヲ度外ニ措
ク可カラサル者ナリ
又草案ニ上ノ例ヲ設クルト雖モ諸因場必ス皆

同法省

罪人ヲ外役セシム可シト云フニ非ス別ニ支障
 ナキ片ハ外役セシムルモ亦可ナリトスルニ在
 ルノミ而ノ又此外役ヲ舉行スルニ政府ヨリ手
 ヲ下シ以テ真ノ職人ニ對シ之カ為メ毫末モ其
 名譽ヲ損セシムルヲナキ片ハ此外役法ノ便宜
 ナルヲ更ニ疑フ所ナカル可シ
 左ニ掲クル普漏生刑法書第十一條第二項ノ除
 件ハ草案ニ之ヲ収用セザリキ
 徒刑ニ処セラレシ罪人其刑ニ在ル間ハ自
 己ニ指揮ヲ自ラ処分シ及ヒ其資産ニ就テ
 他人ノ資産ヲナスノ權ナク必ス成規ニ準
 據シ後見人ヲ立テ其後見ヲ受ク可シ又徒刑
 ノ身人ハ資財及ヒ贏益金等ハ縱令一部分タリ

徒刑人
 自ラ事
 ヲ処ス
 ルノ權

此〔普漏生刑事規則第五百六十八條及ヒ佛蘭西
 刑法層第二十九條ニ準據シタル〕條件ハ徒刑人
 ノ自ラ事ヲ処スルノ權ヲ制限セント欲シ却テ
 資財処分ノ權力ニ及ホシ之カ為メ政府ヲシテ
 別ニ後見事務ヲ置カシムルノ煩アリ又徒刑ニ
 処セラレシ罪人ハ大抵皆資財ヲ有セサレハ徒
 ラニ公署ヲ煩ハシ無益ノ帳簿ヲ堆積セシムル
 ノミニシテ徒刑ニ処スルノ趣意ニ適ス可キ成
 蹟ナク且本人ニ於テモ之カ為メ寸分ノ益ヲ得
 ルヲナシ若シ真ニ資財アル片ハ却テ無罪人家
 族轉々困厄ニ迫ルノ弊アルニ過キサルノミ是
 七實際ニ經驗シタル所ナリ

然レ其徒刑人ハ其身ノ囚場ニ在ルヲ以テ自己ノ資財ヲ処分セシカ為メ世上ト交通ヲ為シ得ル能ハス且徒刑人ヲシテ其資財ヲ自己ノ私有物ト為シ自由ニ之ヲ其身ノ榮裕ニ供セシムル片ハ刑ニ処シタル効驗ナカル可キ力故ニ此條件モ亦全ク理ニ背キシモノト謂ヒ難シ而シテ徒刑ニ処セラレ身体ノ自由ヲ禁セラレシ罪人ニ其資財ヲ処分スル為メ本刑ノ時間ヲ浪リニ私用セシメス且自己ノ資財ト雖モ恣ニ之ヲ其身ノ榮裕ニ供セシメサルハ素ト徒刑ノ本性タレハ囚場規則ノ敢テ許ササル所ナリ故ニ是等ノ條件ハ故テ之ヲ刑法各條に掲クルヲ緊要ナリトセス

若シ眞正ノ資財ヲ管理スル者トシテ可ラサル片ハ委任人ヲ設ケテ之ヲ託スルモ或ハ後見人ヲ立テハ是レ亦頗ニ廢スルコトヲ得ス取締ヲナサシムルモ其本本人情願ニ任ス可キナリ但シ是等ノ事件ハ之ヲ後見法ニ編入ス可キ力故ニ刑法書ニ屬スルモノトセス
他國ノ立法ニ於テ斯ノ如キ條件ヲ收用セス且既ニ成法アルモ更ニ之ヲ廢スルニ至リシハ恐クハ上ノ事由ニ依ルモノナルハシ
例ハハオランダニシテ刑法書第七章第二條ニ於テハ終身徒刑ニ処セラレシ罪人ノ自ラ事ヲ処置スル權限ヲ更ニ寬ニシ又オーストリアニ於テハ尤ニ掲クルル千八百六十七年十一月十五

日ノ刑法改正(國法纂集第百八十六葉表面)依
テ全ク此制限ヲ廢止セシカ如キ即チ是レナリ
第五條 刑事ノ裁判ニ於テ總テ罪人ノ有テ
事ヲ処置スル權カハ自今之ヲ剝奪シ或ハ之
ヲ限制ス可ラス因テ千八百五十二年五月二
十七日頒行刑法書ノ第二十七條ノ規則ハ之
ヲ廢止ス云々
和オストリヤ上院ノ書記官「フォン・シュメルリンク」
氏此新法ニ就テ辨解ヲ為ス下左ノ如シ
千八百五十二年五月二十七日頒行刑法層中
此一條ノ規則ハ從來大抵實用ヲ為サ、ソキ
○此規則ヲ以テ弊害ヲ防カシト欲セシト虽
然其趣意ハ却テ違スル至ラサリキ ○裁判

申渡於期ヨリ其刑ヲ受ケタル人期ヲ至ル
下テ法律ニ関スル事件ヲ取扱ヒ得ハキ時間
其トキニアラサリキ ○此條件ヲ廢スルモ實際
ニ於テハ些少ノ變化ナカル可シ云々
又此條件ハ千八百六十一年編成「レ」刑
法草案第四十五條ニハ猶本之ヲ存シ其理由(第
一冊第百五葉裏面)ニ於テモ亦其廢存ヲ辨駁セ
シト虽氏千八百六十八年ノ草案ニハ終ニ之ヲ
廢セリ

第十三條

城寨禁ニ於テハ草案ノ趣意ヲストリゲヤ、ホ子
ス名譽ト云ハ損セサル羅馬ノ刑名ノ体裁ヲ用
シト欲セシニ在テ此刑ハ罪人ヲ捕囚シ其事

禁獄

業ト行状トヲ監視スルノ外別ニ制限ヲ立テサ
ルハ本條ニ就テ之ヲ見ルハシ
普漏生刑法書ニ制定シタル城寨禁ノ最重ノ期
限二十年ナルモノヲ草案ニハ減シテ其半期ト
セリ是レ此刑ニ於テモ亦前條徒刑ノ期限ヲ減
縮セント欲セシニ就テ辨解シタル緣由ト相同
シク且彼刑ヨリ更ニ一層ノ減縮ヲ要セシニ因
レリ
第十四條
刑ノ等級ニ於テハ禁獄ハ其期ノ長短ヲ問ハス
其性質ヲ以テ之ヲ論スレハ直ニ徒刑ニ次クモ
ノトス
禁獄ト徒刑ト別アル所以ヲ徴ハ徒刑ニ在ルノ

罪人ハ必ス皆之ヲ囚場ノ工業ニ使役セシム可
シト雖氏禁獄ニ於ルノ罪人ハ然ラス強テ之ヲ
囚場ノ規則ニ從ハシメス唯々本人ノ常業ニ應
ジ其習熟シタルニ事ハ之ヲ當マシムルモ可ナ
リト云フノミ
禁獄ノニ役ヲ制限スルト上ノ如クナル片ハ外
役ノ誤使ヨリ生スル弊害モ自ラ之ヲ防クニ足
ル可シ何トナレハ本人素ヨリ外業ヲ家業トシ
テ能ク之ニ慣習シタルニ非レハ之ヲ外役ニ使
フヲ得サルカ故ナリ
禁獄ニ於テ決シテ罪人ヲ外役セシム可ラスト
定ムル片ハ其罪人ノ為メ却テ一ノ仁事ヲ禁セ
ント欲スルニ異ナラサルモノト如シ故ニ草案

羈絆
諸刑ノ
期限ヲ
算スル
法

ニハ禁獄ニ於テモ亦從來普漏生ニ在テ行ハル
ル罪人ノ外役ヲ収用セリ

第十五條

日週年ヲ以テ期限ヲ算スル羈絆ノ諸刑ニ於テ
ハ二十四時ヲ一日トシ七日ヲ一週トシ又年ヲ
算スルニ稔曆ヲ以テスルハ北獨乙諸國ニ於テ
皆然リ

然レ氏月ヲ以テ期限ヲ算スル羈絆ノ諸刑ニ在
テハ其法各國皆同一ナルニ非ス

例ハハ「サツキセン」刑法卷第三十二節「ブラウン」
「イグ」刑法卷第十六條「リエーベツキ」刑法卷第十四
條及「ハ」ブルグ「刑法卷第十四節ノ如キハ稔
曆ニ從テ月ヲ算シ普漏生刑法卷第十五條「ベツセ

「刑法書第三十三條「オルゲンブルグ」刑法卷第

十節「ライリシギア」諸國刑法書節十節及「十八

百六十八年編成「ブレトメン」刑法草案第十九條
ノ如キハ三十日ヲ以テ一月トス

草案ニハ乙ノ方法ヲ採用セリ甲ノ稔曆ニ從テ
月ヲ算スル方法ハ因場事務ノ為メ簡便ナリト

雖氏亦不平ノ所アレハ罪人ノ為メ損失ナキ能
ハス故ニ乙法ヲ以テ勝レソトス

本條ノ結末ニ羈絆刑ノ期限ハ全日ヲ以テ算ス
可キ云々ノ規則アルハ二日以上ノ羈絆刑ニ於

テ其期日ヲ算スルニ一日ノ一小部分ハ之ヲ全
日ト為シ算入ス可ラサルヲ明示セシモノナリ
第十六條

羈絆諸
刑ノ此
例

草案ニ於テ羈絆ノ諸刑比例ヲ制定スルニハ普
漏生刑法書第十六條ヲ標準トセリ
普漏生刑法書ニ一年ノ禁獄ヲ八月ノ徒刑ニ比
例スルハ徒刑ノ酷烈ナルヲ十分ニ省慮セサル
ニ出テ其比例平等ナラサルカ故ニ(千八百五十
一年)イブチク出版バトセレル氏普漏生刑法
書集註第五十八葉表面草案モ亦其例ニ倣フ片
ハ真ニ公正ヲ得タルモノニ非スト謂ハシ乎決
シテ然ル可ラス何トナレハ第二十五條ニ於テ
詳ニ辨解スル如ク草案ニハ徒刑ニ屬ス可キ制
限ヲ全ク変更セシメ且大ニ之ヲ寛宥ナラシメ
タルヲ以テナリ
此ニ刑ヲ交換セシムルニ當リ一日以下ノ時刻

孤囚

又且數ニ算入セサル新法ハ實際ニ生スル疑惑
防カシカ為メ設ケタル所ノモノナリ
第十七條及ヒ第十八條
草案ニハ徒刑及ヒ禁獄ノ刑ヲ受ケシムルニ第
十七條孤囚ヲ用フルヲ許容シ第十八條ニ於テ
其期限ハ本人ノ兼服ナキ片ハ六年ヲ過ス可ク
サルノ制限ヲ設ケタリ
茲ニ刑例中ニ孤囚法ノ収用ス可キ條理ト其實
際ノ効驗トヲ學問上ニ穿鑿シ来ルヲハ此辨由
ノ趣意ニ非ス
縦令上ノ如ク其論理ヲ穿鑿スルモ此ノ如キハ
已ニ數十年以來ノ各立法會院議案ト大部ニシ
テ且夥多ナル此般ノ著述書類トニ二三葉ノ紙

先ツ制限ヲ立テ、少シク其自由ヲ救ルシ漸々
真ノ放解ニ移ラシムルニ適當ノ方法タル成績
ヲ現ハセリ。○千八百九十一年「バ」ル「ク」氏
限○減縮及獨ニ千八百九十五年「バ」ル「ク」氏
論○協ラノ論ヲ見ル可制限ヲ立テ、放解スルハ理
預メ惡行ヲ為サル可キヲ期シ假リニ放解セ
ラレシ者ハ固ヨリ真ニ自由ヲ占ルノ國民ト同
シキ權ヲ有スルヲ得ハキニ非ラス故ニ夫ノ已
ヲ得スノ警察監護ヲ命スルモノ即チ千八百五
十年二月十二日ノ普漏生法〔法令纂集第二十三
葉表面ヨリ第二十四葉裏面〕ノ如キ身體自由ノ
保護法ニ準據シテ監護ヲ受テ可ラスト申立ル
等ノ權ハ之ヲ制限ス可シト雖正當ノ家業ヲ

營且再々本然ノ權カヲ得テ亦欲シテ善行ヲ
為サシトスル為ニ十分ナル可キ身體ノ自由
ハ之ヲ得セシメサル可ヲサルモノトス
放解ノ式放解人ノ守ル可キ制限及テ放解ヲ止
メ再々羈絆ニ就カシムルト真ニ放解シテ全ク
其自由ニ歸セシムルトニ於ル詳細ノ規則ハ草
案ニ一々論述ス可ヲサルモノトセリ
聯邦内諸裁判所ノ設制互ニ等シカラサルト殊
ニ諸因場事務ノ各々相異ナルトヲ以テ繼令ニ
國法ヲ設テ規則ヲ一ニセント欲スルハ實際ニ
於テハ自然異ナラサルヲ得サル可シ故ニ假放
法ノ細目ハ各邦政府ヲシテ各自ニ之ヲ制定セ
シムルヲ良トス

千八百六十二年以降此法ヲ國君ノ茲惠トセシ
 ニモレヨ設ケタル「サツキセン」王國ニ於テハ此法
 ニ就テ詳密ナル條例アリ是レ聯邦内他ノ地方
 ニ於テモ亦標準トナス可キモノナレハ左ニ其
 全文ヲ掲グルモ要用ナラサルニ非サルヘシ
 申告書第一号
 内務省ヨリ「ワルデハイ」各名「ワラツカウ」各地
 フベルツスブルグ各名 囚場管轄廳ニ
 達スル條例
 國王陛下茲惠ノ旨趣ヲ以テ徒刑人并ニ工役
 人ニ賜暇法ノ施行ヲ試ミン₁ヲ勅ス因テ司
 法省ト協議ノ上此法ヲ施行スルニツキ曩ニ
 同省ヨリ該廳ニ達セシ規則ニ合附シ心得ノ

為メ別冊地方廳ニ達スル規則ノ寫ヲ添ヘ更
 ニ當省ヨリ該廳ニ在ノ各條ヲ達ス
 第一條
 賜暇法ノ目的ト其成績トハ賜暇ヲ得タル罪
 人ヲ滞在ロシムル土地ニ大ニ相関スルヲ以
 テ囚場管轄廳ハ本件ヲ取扱フニ付キ殊ニ土
 地ヲ撥ムノ₁ニ精々注意ス可キ事
 別冊ノ地方廳ニ達スル書第一則ニ從ハハ放
 解人ノ滞在地ヲ定ムル規則ハ賜暇人ニモ亦
 適用ス可ク故ニ囚場管轄廳モ亦囚人賜暇ノ
 事ニ就テハ千八百六十年六月十三日ノ第千
 三百九十六号達各第六章第一則ニ照準シ取
 扱フ可キ事

囚人ノ申請ニ由リ囚場管轄廳ニ於テ賜暇ノ
亦理ヲ為サント欲スル片ハ其囚人ニ賜暇ヲ
許スノ可否ト之ヲ許ス片ハ何レノ土地ニ滞
在セシム可キヤトハ固ヨリ該廳ノ所見ニ從
ヒ之レヲ取捨ス可キ事
然レ片囚場規則第五十六條第五項ニ從ヒ囚
場管轄廳ヨリ賜暇ヲ給セント欲スル片ハ其
事ヲ決セサルノ前ニ必ス囚人ノ情願如何ヲ
問フ可キ事

第二條

賜暇ヲ請フニハ囚場規則第八十五條ニ從ヒ
茲惠歎願ノ式ニ倣フ可シ但シ本件ニ限り初
度ノ茲惠歎願ト見儼ス可キモノト虽片直ニ

司法省ニ届出ツ可キ事

第三條

第一項 賜暇ノ公証トシテ囚場管轄廳ヨリ
賜暇人ニ別紙雛形ニ倣ヒ滞在地ト賜暇期限
トヲ記載シタル賜暇票ヲ下付ス可キ事
第二項 賜暇票ヲ下付スルニハ票面ニ掲載
スル行狀規則ヲ詳細ニ本人ニ解示シ且少許
ト虽片其規則ニ違背スル片ハ再ヒ囚場ニ呼
戻ス可キ旨ヲ明白ニ言渡シ置ク可キ事
第三項 賜暇人ノ生國切手ハ刑場記録課ニ
留メ置ク可キ事
第四項 賜暇票面ニハ又賜暇人ノ必ス通行
不可キ道程ヲ記載シ置ク可キ事 但シ已ラ

得サル事情若クハ相當ノ私務アリテ危害ノ
虞ナキハ(譬ハ家事取締又ハ暫時ノ飯省ホ
ノ如ク)少シク本路ヨリ迂回スルモ苦シカラ
サル事

第五項 罪人ニ賜暇ヲ許ス片ハ本人滞在地
ノ警視署ニ賜暇票ノ寫壹通ヲ出シ其旨ヲ報
告ス可キ事

第六項 同上ノ片ハ警察吏ニ報告ス可キ為
メ賜暇地區廳ニモ亦別紙雛形ノ届各ヲ出ス
可キ事

第四條
因場規則第一篇ヨリ第三篇ニ至ル第七十四
條第七十六條及第七十七條ノ各件ハ茲惠

ノ為メ罪人ニ賜暇ヲ許ス時ニ於テモ亦之ヲ
適用ス可シ但シ賜暇人ノ便宜ヲ度リ本人貯
蓄金ノ内其幾分ヲ下渡シ殘幾分ハ或ハ之ヲ
預リ置クモ因場管轄廳ノ所見ニ從フ可キ事

第五條
別紙雛形ニ倣ヒ賜暇表ヲ編制シ置キ必要ノ事
件ハ其時々之ヲ追記シ(第六條第十條及ヒ第
十二條ヲ比較ス可シ)賜暇票ノ納付其期ニ後
レサル様(第七條ヲ比較ス可シ)監督ス可ク又
此監督ノ為メ第七條第一項ニ從ヒ賜暇票納
付定期ノ日ハ賜暇日記ニ混雜ナキ様明白ニ
登錄シ置ク可キ事

第六條

賜暇人滞在地ヲ轉移スル片ハ〔地方廳ニ達スル者第五則ヲ比較ス可シ〕從來其滞在地ノ警視署ヨリ必ス其旨ヲ因場管轄廳ニ報告ス可キ事

第七條

第一項 賜暇票若シ賜暇定期ノ時ヨリ二十
八日〔四週〕前ニ納付ナキ片ハ因場管轄廳ヨリ
之ヲ促ス可ク若シ賜暇人猥リニ賜暇地ヲ去
ル片ハ捕護ノ廣告ヲ公布シ何人ヲ論セス見
當リ次第當人ヲ捕縛ス可キ様取扱フ可キ度
第二項 右等ノ事件ナル片ハ遅クモ賜暇定期
ノ日ニ至ル迄ニ賜暇人其日ヨリ前ニ因場
ニ辞戻セシムル其時其旨ヲ届出シ可キハ

此限ニアラス〔其事實ヲ明細ニ司法省ニ報告
ス可キ事〕

第八條

因場管轄廳ニ於テ受取タル賜暇票ニハ〔地方
廳ニ達スル者第五則ヲ比較ス可シ〕同廳ヨリ
賜暇中ノ事情ヲ添付シ至急ニ之ヲ司法省ニ
送致ス可キ事

第九條

賜暇ノ延期ヲ為ス片ハ因場管轄廳ニ於テ其
旨ヲ賜暇票面ニ記載シ賜暇地警視廳ニ之ヲ
送付シテ本人ニ下渡方ヲ取計ハセ魚ヲ區廳
ニモ其旨ヲ報告ス可キ事〔第三條第五項及
第六項ヲ比較ス可シ〕

第十條

第一項 賜暇人ヲ呼戻スルハ其緣由ヲ本人ニ言渡シタル上入場セシメ殘刑ヲ受テシム可キ事

第二項 呼戻シタル賜暇人ヲ引渡スニ付キ警視署ニ於テ立替置キシ當人ノ衣食費等ハ計算ヲ立テ同署ヨリ申入次第因場管轄廳ニ於テ因場金ノ内ヨリ先ツ之ヲ償却シ後ニ罪人貯蓄金ノ内ヨリ其高ヲ返納セシム可キ事

第十一條

賜暇人ノ之ヲ罪負簿中ヨリ全ク消除ス可ラサルハ勿論ナリト雖其帳簿ニ賜暇人或ハ賜暇呼戻人ト記載シテ之ヲ本罪人ト分テ判

然其區別ヲ立テ置ク可キ事

第十二條

賜暇人真ノ赦免ヲ得タル片ハ罪負簿面ヨリ其名ヲ削去シ別紙雛形ノ赦免狀ヲ造リ行狀保証書(格別ノ疑ヒナケレハ之ヲ留置ク可ラズ)生國功手及ヒ預リ置キシ貯蓄金アル片ハ共ニ之ヲ罪人當時ノ滞在地警視署ニ送付シテ本人ニ下渡方ヲ取計ハス可キ事
但シ行狀保証書ヲ加付シ罪人ヲ放解スルニ就テ規則中ニ抵触スル各條ハ廃止ス可キ事

以上ハ國王陛下ノ宣旨ニ出ルモノナレハ仔細ニ注意シテ遵守ス可キ様内務省ヨリ

因場管轄廳ニ申告スルモノナリ
千八百六十二年八月五日
於「ドレスデン」内務省

○ 申告番第二号

因場罪人ノ賜暇ニ就テ内務省ヨリ地方
廳ニ達スル旨

國王陛下ハ英國ニ於テ罪人改良ノ目的ヲ以
テ制定セシ有効ナル設置ノ經驗ニ倣ヒ事誼
ノ然ル可キモノハニ限リ試ニ徒刑先ニ五
役刑ニ処セラレシ罪人ノ己ニ本刑ノ幾分ヲ
受ケシ後ニ行状善良現ニ改良ノ姿アル者
ハ未タ全刑ヲ終ラサル前ニ茲惠ヲ以テ定期

ノ暇ヲ施與シ因場ヨリ放解シテ愈々其改良
セシ的實ノ確證ヲ得シ力為メ之ニ産業ヲ營
マシム可キヲ許可スル宜旨ヲ下セリ
真ノ赦免ヲ與フルノ可否ト其然ル可キ時期
ヲ定ムルト或ハ再ヒ因場ニ呼戻シ殘期ノ刑
ヲ受ケシムルトハ專ラ賜暇人ノ行状如何ニ
由リ取計フ可キ事

上ニ掲載セシ旨趣ヲ司法省ヨリ申告セシ規
則先ニ別冊寫ノ通り内務省ヨリワルデハイ
ニ「ワウツカウ」及ヒ「アバル」ニテスブルクノ因場
管轄廳ニ達セシ書ニ照シ更ニ本年六月十三
日及ヒ同十一月十三日因場先ニ懲惡場罪人
放解ノ監督ニ付キ達シタル規則ニ會附シテ

地方廳ノ心得ノ為メ且其廳ヨリ管下區廳及
ニ警視署ニ通達セシムル為メ内務省ヨリ更
ニ左ノ各條ヲ地方廳ニ告達ス

第一則

去年六月十三日及ヒ同十一月十三日因場荒
ニ懲惡場罪人放解ノ監督及ヒ其警察ノ事ニ
ツキ達シタル規則及ヒ主旨ノ左ノ各條ニ由
テ変革スル所ナキ分ハ亦同場賜暇人ノ監督
ニ就テ適用ス可ク且去年六月十三日ノ規則
第一章中ノ放解人一己ノ為メ及ヒ一般ノ保
護ノ為メ放解人ノ滞在地ヲ定ムル各條ハ殊
ニ適用ス可キモノトス但シ賜暇人ヲ滞在地
ニシテ可キ土地ノ本人ノ郷里ニ非ル片ハ該地

警察署ニ其旨ヲ許可ヲ請フ可キ事

第二則

放解人ノ監督ニ就テ區廳ノ公務ニ関シ掲ケ
タル各件ハ賜暇人ノ監督ニ適用ス可キモノ
ナシ故ニ此賜暇人ハ專テ警視署ニ於テ警察
ス可シト雖片以テ補翼ス可キ警察吏ニ報知
センカ為メ賜暇ノ時ハ毎回必ス因場管轄廳
ヨリ區廳ニ其旨ヲ通達ス可キ事

第三則

前ニ述ルルカ如ク賜暇人ハ因場内ニ在テ行状
ノ善良ナル真ニ改良ノ姿ヲ現ハシ因テ因場
ヲ放解セシ者ナレハ統テ上等ノ監護ニ屬ス
可キ人ト見做ス可キ事

故ニ賜暇人ハ段々上等ノ級ニ編入スルニ
及バカレハ本年十一月十三日達者第三則放
解人分等ノ條ハ賜暇人ニ就テ要用ノモノナ
ラス又同達者第三則第八項及ヒ第九項放解
人監護ノ等級遷轉ノ方法モ亦賜暇人ニ適用
セサル様心得可キ事

第四則

賜暇人ノ事ハ放解人ノ監護ヲ特ニ擔當スル
諸公署ニ於テ放解人ノ名簿ニ之ヲ登錄スル
ニ及ハサル事

第五則

賜暇ニ因リ因場ヲ出ル者ハ賜暇地ニ到着次
第本人其賜暇票ヲ持参シ其地ノ警視署ニ其

旨ヲ申出テ職業元ニ寄留所ヲ届出ツ可ク且
尔後雇主若クハ業主ヲ易フル片ハ行状如何
ノ保証ヲ賜暇票面ニ記セシテ其時々又之ヲ
同署ニ照合ス可キ事行状規則第四則ヲ比較
ス可シ

賜暇人同シ警視署ノ管内ニ於テ其賜暇地ヲ
轉移セント欲スル片ハ其警視署ノ許可ヲ請
フ可キ事

其移寓セント欲スル地ノ他ノ警視署ノ所轄
ニ属スル片ハ本人自身ニ或ハ其滞在地ノ警
視署ノ受次ヲ以テ移寓地ノ警視署ノ許可ヲ
得タル後甲ノ場合ニ於テハ其許可者ヲ本人
持参シ從來ノ賜暇地ノ警視署ニ轉移ノ旨ヲ

申出ツ可ク又同署ニテ其旨ヲ賜暇票面ニ記
載シ初メ因場ヲ出タル時ト同様ノ方法ニ倣
ヒ移寓地ニ到着ノ日限ヲ定ム可キ事
賜暇人ノ滞在地ヲ轉移セシキハ從來ノ賜暇
地ノ警視署ヨリ直ニ其旨ヲ其所屬ノ因場管
轄廳ニ届出ツ可ク又其移寓地ノ他ノ區廳ノ
管下ニ屬スルキハ其區廳ニモ亦其報告ヲ為
ス可キ事

賜暇人ハ少クモ賜暇尽期ノ五週前ニ賜暇票
ヲ當時滞在地ノ警視署ニ納付ス可ク又同署
ヨリ並其賜暇人ヨリ向後ノ公証人ヲ為シ賜暇票
受納ノ証番ヲ下渡シ置キ本票ハ因場管轄廳
ニ通付ス可キ事(行狀規則第九條ヲ比較ス可

シ)

右警視署ヨリ賜暇票ヲ因場管轄廳ニ通送ス
ルニハ遅クモ賜暇尽期ノ二十八日前ニ必ス
到着ス可キ様取計ノ可キ事

第六則

賜暇人轉移セント欲スル時危害ノ虞ナキニ
於テハ警視署ヨリ之カ支障ヲ為ス可ラサル
事

賜暇地ノ警視署ハ其地方廳ノ許可ヲ經テ賜
暇人ニ旅行ヲ公許スルヲ得ル然レモ是
レ唯内國ノ旅行ノミニ限リ外國ノ旅行ハ本
人職業見習ノ為メ其職業ノ師家ニ赴ク時地
方廳ニ於テ事情ノ然ル可キヲ察思スル者又

ハ隣國ハ我國境ニ近接スル市場ニ赴ク者ニ
非レハ之ヲ許可ス可ラサル事
一日乃至三日ノ内國旅行ハ賜暇地ノ警視署
ニ於テ之ヲ專決スルノ權アリ但シ此ノ如キ
時ハ同警視署ニ於テ賜暇票面ニ其公許ノ証
ヲ記ス可キ事
賜暇人其職業研究ノ為メ見習ノ業ヲ為サン
ト欲シ谷処ニ徧歴スルヲ請フ時モ亦同漸ノ
事
賜暇人ニ旅行ヲ公許スルニハ旅行地ノ景況
ト旅行ノ目的ノ如何トヲ仔細ニ注意ス可ク
且行狀規則第九條ニ照準シ賜暇期限ニ違ハ
サル様其制限ヲ立ツ可キ事

第七則

賜暇人若シ賜暇票面ヲ以テ告示セシ規則ニ
違背シ又ハ他ノ事由アリテ之ヲ因場ニ呼戻
サ、ル可ラサル片ハ賜暇地ノ警視署ヨリ其
證據書類ヲ添へ先ツ其趣ヲ至急ニ司法省ニ
伺出テ其旨令ヲ待テ因場引渡方ヲ取計フ可
キ事
司法省ノ命ナク賜暇人ヲ因場ニ回送スルハ
警視署ノ權限内ニ在ラス故ニ事ノ火急ニ迫
リ已ヲ得サル時ハ其賜暇人ヲ先ツ捕護シ置
ク可キ事

賜暇人呼戻ノ事ハ司法省ニ於テ裁決シ警視
署ニ於テ処分ス可キモノナレハ如何様ノ法

ト至氏茲惠ノ為メ之ヲ枉クルヲ得ス又必ス
茲惠ヲ受ケシム可ラサル事

呼戻人引渡ノ方法及ヒ其諸入費ハ生長改良
人引渡方ト同様ニ取計ヲ可キ事

賜暇人ノ呼戻及ヒ其原由ニ係ル昏類ト賜暇
取消ノ公証ヲ記セシ賜暇票トハ賜暇人引渡

ノ時必ス之ヲ因場管轄廳ニ納付ス可キ事
相當ノ衣食費ノ立替ハ計算ヲ立テ申入次第

第八則

因場管轄廳ヨリ警視署ニ償却ス可キ事

賜暇人ノ猥リニ賜暇地或ハ後ニ公許ヲ經テ
轉移セシ地ヲ忒ルニ付キ捕護ノ廣告ヲ公布
シ探索セサル可ラサル片ハ現今施行ノ普通

國法ニ從ヒ之ヲ掌トル警視署ニ於テ其事ニ
着手ス可キ事

賜暇人ノ重輕罪ヲ犯スニ付キ之ヲ捕護或ハ
探索ス可キ片モ亦當今施行ノ普通法則ニ照

準シ之ヲ取計ヲ可キ事

賜暇人警視署ニ於テ懲治ス可キ違令ノ罪ヲ
犯ス片ハ改良院ニ入ル可キ者ノ外因場呼戻

ノ決不決ヲ問ハス先ツ其罪ヲ糾彈ス可キ事
賜暇人猥リニ許可ノ地ヲ忒リ或ハ違令或ハ

漸獄ノ罪ヲ犯ス片ハ其何レヲ問ハス因場ニ
呼戻ス丁ノ決ヲ請ハシカ為メ其趣ヲ所轄ノ
警視署ヨリ至急ニ司法省ニ報告ス可キ事
賜暇人警視ノ懲罰ヲ受クル片ハ其旨ヲ其警

視署ヨリ所屬ノ囚場管轄廳ニ報知ス可キ事

第九則

賜暇人ハ千八百三十四年十一月二十六日ノ
住居法第十六條以下ノ規則ニ照準シ通常ハ
之ヲ追放ニ処ス可ラサルモノトス然レモ警
視署ニ於テハ之ヲ囚場呼戻ニ処セント欲ス
レモ司法省ヨリ其命ナク第七則ヲ比較ス可
シ且其罪ノ必ス免レ難キ者ノミニ限リ之ヲ
追放スルハ苦シカラサル事

第十則

賜暇人其賜暇期限間ノ行状ノ非議ス可キモ
ノナク賜暇尽期後ニ真ノ赦免ヲ受ケタルモ
ハ囚場管轄廳ニ於テ別ニ疑フ可キモノナケ

レハ其本人ニ行状保証書ヲ下渡スニ因リ此
ノ如キハ爾後警視署ヨリ之ヲ監察スルニ及
ハサル事

各警視署ハ賜暇法施行ニツキ勉テ國王陛下
ノ宣旨ニ適フ如ク其職掌ヲ尽ス可シ是レ内
務省ノ庶幾スル所ナリ
右ノ趣精々行届ク可キ様地方廳ヨリ區廳完
ニ警視署ニ指令ス可シ因テ本文規則各ノ寫
要用ノ冊數ヲ添ヘ此旨ヲ内務省ヨリ地方廳
ハ告達スルモノナリ

千八百六十二年八月五日

於トステン

内務省

以上ノ告達ニ関スル諸雛形ハ施行ノ際参考ニ

供スルカ為ノ以テ左ニ掲クルモ敢テ要用ナラ
サルニ非ル可シ

雛形第一号

本書所持人 何ノ某 左ノ人相ノ者

生國 何々何々

何刑法書第幾條何罪規則ニ照シ

何々年何ヶ月ノ何刑ニ処ビラレ

十何百何十何年某月某日

當刑場ニ引渡サレテ後

何様ノ行状ニテ真ニ改良ノ姿アルヲ以テ

本日ヨリ 何々年何ヶ月何々日 間賜暇ヲ給シ

某地ニ滞在セシム可キニ付キ本日ヨリ
何ヶ月内ニ同地ニ到着ス可キ事
右ノ公証トシテ本人ニ此

賜暇切手

ラ下渡ス者也

年号月日

何地刑場管轄廳

人相書

一何々 何々

一何々 何々

一何々 何々

一何々

何々

一何々

何々

通行道筋

年月日

何地出立

通行筋

何地何地

参着

何地

行状規則

第一條

賜暇人ハ警視署ノ監察ヲ受ク可ク而ノ真ノ赦免ヲ受ルモ或ハ再々因場ニ呼戻サ、ルモ專ラ本人ノ行状ニ関スレハ常ニ其行状ノ上ニ注意スル事

第二條

殊ニ左ノ齊行アルハ因場ニ呼戻不可キ

事

第一項 職業ニ急ル事

第二項 悪名アル人ト交ル事

第三項 公衆ノ場所ニ於テ酩酊シ居タル事

第四項 衆人ノ羞恥ス可キ所行ヲ為ス事

第五項 一定ノ職業ヲ管マサル事

第六項 猥リニ公許ノ滞在地ヲ去ル事

第七項 次ニ掲ケタル諸届ヲ怠ル事

第三條

賜暇地到着ノ日限内ニ相違ナク其地ニ到着シ本人其地ノ警視署ニ賜暇票ヲ持参シ

之其旨又申出テ職業完ニ寄留所ヲ届出ツ
可キ事

第四條

雇主若クハ業主ヲ易フル片ハ其主人ヲシ
テ賜暇票面ニ行状如何ノ保証ヲ記セシメ
其地ノ警視署其旨ヲ照合ス可キ事

第五條

同一ノ警視管内ニ於テ滞在地ヲ轉移セン
ト欲スル片ハ其警視署ノ許可ヲ請フ可キ
事然レ其移寓地ノ他ノ警視管轄ニ属スル
片ハ先ツ其地警視署ノ許可ヲ請フ可キ事
移寓地ノ警視署ノ許可ヲ請フ行ハ從來ノ

滞在地所属ノ因場管轄廳若クハ同上警視
署ノ受次ヲ頼ムテ可キ事

轉移ノ許可ヲ受ケタル片ハ本人從來ノ滞
在地ノ警視署ニ其許可ノ公証ト賜暇票ト
ヲ持参シ其旨ヲ届出ツ可ク又其警視署ヨ
リハ右賜暇票面ニ其旨ヲ記載シ更ニ本人
ニ下渡ス可キ事

從來ノ滞在地ノ警視署ニ於テ取極メタル
日限内ニ新滞在地ニ到着シ其地ノ警視署
ニ本人賜暇票ヲ持参シ第三條ノ規則ニ倣
ヒ届方ヲ為ス可キ事
上ノ規則ハ賜暇人郷里ニ般省セント欲ス
ル時ニモ亦適用ス可キ事

第六條

旅行ヲ為サント欲スル片ハ其趣ヲ滞在地ノ警視署ニ申込ニ置キ地方廳ノ指令ヲ待ツ可キ事

職業見習ノ為メ遊歴シ或ハ各地歴行ノ職業ヲ営マント欲スル片モ亦同断ノ事

第七條

賜暇票ハ唯賜暇地ニ滞在スルヲ公許セシモノナレハ俟リニ賜暇地ヲ去ル片ハ捕護ノ廣告ヲ公布シテ捕縛ス可シ因テ右等ノ事ナキ様常ニ注意ス可キ事
故ニ暫時ト金片賜暇地ヲ去ラント欲スル片ハ必ス其地ノ警視署ニ其趣ヲ届出テ賜

暇地ヲ去ラザルヲ得サル片ハ情願ノ上警視署ニテ其旨ヲ賜暇票面ニ記シ前以テ之ヲ公許シ置ク可キ事

第八條

賜暇票ハ常ニ携帶ス可キ事

第九條

賜暇尽期ノ五週前ニ賜暇票面ニ最後ノ雇主若クハ業主ノ保証ヲ記セシメ(第四條ヲ見ルヘシ)因場管轄廳ニ送付スル為メ本人持參シテ之ヲ其地ノ警視署ニ納付シ同署ヨリ其受納ノ証各ヲ受取置キ尔後ハ賜暇ノ公証トシテ常ニ此証各ヲ携帶ス可キ事

第十條

賜暇人ノ因場ニ呼戻サレハ付テハ如何ナル法ト虽尺茲惠ヲ以テ之ヲ枉クルヲ得ス又茲惠ヲ仰クノ權ナキ事

第十一條

因場呼戻ニ就テ生スル本人ノ費用ハ本人貯蓄金ノ内ヨリ償却ス可キ事

賜暇人諸届先ニ賜暇地轉移及ヒ旅行等ニ付キ警視署ニ於テ記シタル公証

- 一 何々之事
- 一 何々之事
- 一 何々之事

雇主若クハ業主ノ保証

- 一 何々
- 一 何々
- 一 何々

雛形第二号

警察卒ニ通達セシムルカ為ノ何地區廳ニ報知ノ文

人相書

賜暇 姓名

何々 何刑法各第幾條何罪規則ニ

何々 照シ 何ケ年何ケ月何ケ日

何々 刑ニ処セラレ某年某月某日

何々 以来當因場ニ引渡サレ居リタ

後本日ヨリ 何ケ月何ケ日

何地ニ於テ賜暇セシムルニ付キ

生國

何々
何々

何ケ日内ニ同地ニ到着ス可キ事
年月日

何地刑場管轄廳

雜形第三号

本番所持人

生國何々何々

某年某月某日

何刑法各第幾條何罪規則ニ照シ

何ケ年何ケ月間ノ何刑ニ処セラレ

當因場ニ引渡サレ爾後某年某月某日以来

何ケ年何ケ月ノ賜暇ヲ給シ居タル後

本日更ニ茲惠ノ旨ヲ以テ赦免スル者也

但シ何々ノ所行アル片ハ規則ニ照シ再
ヒ入場セシム可キ條向後右等ノ所行之
レナキ様心掛ケ居ル可キ事
右ノ公証トシテ本人ニ此

赦免狀

ヲ下渡ス者也

年月日

何地刑場管轄廳

人相書

一何々

一何々
一何々
一何々
一何々

カツキセシ王國諸囚場ニ於テ千八百六十二年及千八百六十八年ノ賜暇人負ノ比較完ニ其好成績ヲ得タルトハ同國官誌ヨリ謄寫セシ左ノ表ニ於テ之ヲ見ル可シ

第一	場名	年号	賜暇人	呼戻人	呼戻原因
一	ハイルデ	一八六三年	八頁	無	
二	ハイム	一八六四年	七頁	無	
三	徒刑場	一八六五年	十頁	一頁	竊盜
四		一八六六年	九頁	無	
五		一八六七年	七頁	無	
六		一八六八年	五頁	無	
七	計		四七頁	二頁	

第一	場名	年号	賜暇人	呼戻人	呼戻原因
一	ハイルデ	一八六三年	八頁	無	
二	ハイム	一八六四年	七頁	無	
三	徒刑場	一八六五年	十頁	一頁	竊盜
四		一八六六年	九頁	無	
五		一八六七年	七頁	無	
六		一八六八年	五頁	無	
七	計		四七頁	二頁	
八	第二	一八六二年	四頁	無	
九	ツウヒツカ	一八六三年	二七頁	無	
十	ウ	一八六四年	二六頁	無	
十一	エ役	一八六五年	五一頁	一頁	狼去賜暇
十二	場	一八六六年	三二頁	無	

同法

地狼去賜暇

第三(甲)	一八六七年	四五頁	一頁	行状不正
司法禁	一八六八年	三八頁	無	
獄	計	二二頁	二頁	
乙「アベ				
ルツス	一八六五年	二頁		
ブルグ	一八六六年	一頁	二頁	重罪犯
婦女工	一八六八年	一頁		
役場	計	五頁	二頁	

第四相	一八六四年	二頁	無	
トヘ子ツ				
キ 婦女				
工 役場	乃至	二頁	無	
始マ	一八六八年	二頁	無	
計		二頁	無	
合計		二六頁	六頁	

第二十三條

草案ニハ一列トレルル大納我セヲ以テ最輕ノ罰
 金高ト定メ而シテ又同昏中ニ二千タレルヨリ
 多キ罰金高ノ條例ハ之ヲ見ルナシ但シ刑法
 書ト併行ス可キ他ノ國法例ハ租稅罰則中ノ

租稅罰則中ノ

罰金高ノ如キハ此限ニ非ラス
凡ソ罰金ノ條例ヲ公布スルニハ其最重ノ高ハ
預メ之ヲ一定セシテ裁判官ノ所見ニ任セ罪
犯人ノ身位ニ應シ其幾分ヲ出サシム可シト為
ス刑事立法原論第二冊第八十條表見
シハニ於テハ罰金法ノ体裁却テ資財没入法ニ
移ラシムラ恐レテ収用セサリキ
罪人貧困ナルカ為メ罰金ヲ出ス資力ナキ片ハ
其身ヲ使役シテ其金高ヲ償ハシム可シト為ス
論ノ如キモ亦一般ニ之ヲ履行スルヲ得ス何ト
ナレハ此論ノ如キハ即チ千八百五十二年六月
二日ノ普漏生法第十二條第十三條及ヒ第四十
二條ノ立木ノ竊盜罰則法令纂集第百五十三條

表面ヲ犯ス者ノ如ク僅ニ二三ノ場合ニ於テハ
猶ホ之レヲ適用スルヲ得ヘシト雖モ若シ之ヲ
普通ノ法ト為シ總テ犯人ノ罰金ヲ出ス能ハサ
ル者ヲ悉ク工役刑ニ換移ス可キ條例ヲ公布ス
ル片ハ實施上著明ナル障碍アルカ為メナリ
故ニ草案ニハ罰金ヲ出ス能ハサル罪人ハ之ヲ
羈絆刑ニ移スノ法ヲ存スルヲ以テ十分ト為ス
ヲ欲セリ
此換移ヲ為スニハ一日ノ禁獄ニ至五ヶ月ノ
ノ罰金ヲ以テ一日ノ禁獄ニ比例ス可ク然レモ
此換移セシ禁獄ハ其期限必ス二年ヨリ長カル
可ラス數刑俱免ノ者ハ此限ニ非ス
換移ノ羈絆刑ヲ以テ猶ホ償フ能ハサル殘刑ヲ

更ニ罰金ヲ以テ収贖スルヲ許スノ法ハ他國ノ
立法即チ千八百六十一年十一月十日頒行「バイ
アル」刑法卷第二十七節ノ規則及ヒ千八百六
十八年編成「ブレイ」刑法草案第三十四條ノ
論ヲ學ビシモノナリ
上ノ法ハ千八百三十八年一月二十三日頒行運
上罰則第五十五條（普通生法令纂集第三十九葉
裏面及ヒ千八百六十七年聯邦法令誌第四十一
葉表面以下）及ヒ千八百六十七年十一月二日頒
行北獨乙聯邦驛遞法第五十三條（聯邦法令誌第
三十一葉表面）ニ於テ已ニ受ケントセシ換移ノ
羈絆刑ト金片ニテ収贖スルニハ初メ言渡シタ
ル罰金ノ全額ヲ出サシムル規則ニ違フト金片

凡ソ此驛遞運上租稅等ノ罰則ハ普通刑法ノ關
預スル所ニ非ハ固ヨリ上ノ法ヲ以テ是等ノ
規則ヲ設メシメント欲スルニ非ハナリ
條末ハ徒刑ニ添科スル罰金ハ之ヲ換移スルニ
禁獄ヲ以テセズ本罰ノ徒刑ヲ增期シ其罰金ノ
高ヲ償ハシムル規則ハ草案ニ收用セシ刑例ノ
体裁ニ準シ自ラ然ラサルヲ得サル所ナリ（第六
十五條

第二十四條

換用ノ為メニ類ノ羈絆刑或ハ羈絆刑ト罰金ト
ヲ併舉セシ條例アルモノハ凡ソ罪狀ノ輕キモ
ノハ必ス亦其寬宥ノ刑ヲ以テ之ヲ罰ス可キト
固ヨリ已ニ明カナリト金片故ラニ其規則ヲ條

換用ノ
為メニ
二類ノ
刑ヲ掲
グ

民權
剝奪

例中ニ掲ケ裁判官ヲシテニ刑ヲ授ハシムルニ
一定ノ方向ヲ取ラシメント欲スルカ為メナリ
第二十五條

本條ニ於テハ普漏生及ビ他ノ獨乙諸國ノ刑法
書ニ對シ北獨乙聯邦刑法草案中ノ貴重ナル成
蹟ヲ生ス可キ大變革ノ一ヲ舉ク
普漏生刑法各中民權剝奪ノ條件ハ學說上ニ於
テモ大ニ抗論ヲ來シ且實施家ヨリモ亦常ニ行
法上要用ナラサルノミナラス却テ害ヲ起スモ
ノタルヲ認メズレシ規則ノ一ナリトス
普漏生刑法各ニハ終身ノ民權剝奪ト有期ノ民
權剝奪トノ兩様アリ
終身ノ民權剝奪ハ必ス各徒刑ニ屬ス可キヲ定

規ト為スト至氏(普漏生刑法各第十一條)有期ノ
民權剝奪ハ刑名宣告ニ當リ故ラニ之ヲ申渡ス
ヲ要ス(普漏生刑法各第二十一條)
終身ノ民權剝奪ハ罪人ノ羈絆刑ヲ終了シタル
後其期日ヲ限ラス其死ニ至ルマテ國民タルノ
權利ヲ限制シ又ハ其幾分ヲ全ク有セサラシム
ルノ効カアリト至氏有期ノ民權剝奪ハ然ラス
其性タル一定ノ期アリテ其期ヲ終ハレハ復タ
全ク本然ノ權利ヲ得セシムルモノナリ
此民權剝奪法ニ抗シ主張スル論說ノ重ナルモ
ノハ左ニ掲クル刑法學上ノ論理ニ根據セリ
罪人ヲ放解スルハ固ヨリ身體ノ自由ト國民
ノ文障トヲ得セシムルカ為メナリ然ルニ其

放解ノ後ニ尚ホ其交際ノ對手タル他人ノ國民ト共ニ公有ス可キ民權ヲ許與セサル片ハ徒ニ國民ヲシテ一人ノ死物ニ陥ルヲシムルニ過キス是レ豈有期羈絆刑ノ本性ニ背カサラシ哉豈放解ノ真意ニ戾ラサラン哉
實施家モ亦經驗ノ說ヲ擧ケテ云ク
有期ノ羈絆刑ニ処セラレ已ニ放解セラレシ人ハ十八百六十一年編成「グレトメン」刑法草案ノ辨由各第一冊第百十一葉裏面及ヒ第四十九條ニ於テ刑容ノ評ヲ下シタルカ如ク政府之ヲ難治ノ悪性患者ト為シ処分スルニ似テ交際上榮譽ノ分位ヲ得ルノ權ナク因テ又現ニ尊敬ヲ受ケルル地位ニ居ルヲ得ス加之交

際ノ對手タル他人ノ國民ト同級ノ位階ニ並立スル能ハサルハ此罰則ニ服従セズ却テ國民社會ヲ敵視シ此終身ノ民權剥奪法ニ処セラレシカ為メ遂ニ再ヒ重罪ヲ犯スニ至ルト甚シク多シトツテ此ハ刑法新聞紙第九十七號刊行普通
終身民權剥奪ノ抗論家モ此罰法ニ処セラレシ罪人ヲシテ其羈絆刑ヲ放解セラレシ後モ輒スク社會上他ニ抽テシ至重ノ位置ヲ得セシム可ラスト為スハ之ヲ不可ナソトセス故ニ普遍生刑法各中ニ終身ノ民權剥奪ニ処セラレシ罪人ハ亦其終身間
処刑前ニ公擧法ニ從ヒ得タル權利從前ノ官

位官職爵名勲等又ハ賞牌ヲ保襲シ及ヒ退食料完ニ恩賜金ヲ受クルノ榮譽

ヲ禁スルノ規則アルハ敢テ之ヲ理シトセス然ルニ此榮譽ノ禁止ハ有期ノ民權剝奪ニ於テモ亦之ヲ許サ、ル所ナレハ刑法上及ヒ施政上共ニ此有期ノ民權剝奪ノミヲ以テ毫モ十分ナラストスル所ナキカ如シ果シテ然ラハ終身ノ民權剝奪ト有期ノ民權剝奪トノ二者ハ之レヲ並存スルノ要理ナカル可シ論者云ク終身ノ民權剝奪ハ之レヲ屬刑ノ真中ヨリ削除ス可シト亦此理ニ因ルルニ
草案ニ於テハ上ノ理ノ適實ナルニ從ヒ終身民權剝奪法ヲ拋棄シテ一年乃至十年ノ有期民權

剝奪法ノ之ヲ屬刑中ニ收用セリ
爰ニ又上ノ事件ヨリモ尚ホ一層深蘊ナル議問アリ即チ

草案ニ於テハ普漏生刑法各ノ体裁ニ倣ヒ徒刑ニ在テハ總テ民權剝奪ヲ魚子シムルヲ定規トナス可キ欵

或ハ全ク此定規ヲ廢シテ徒刑ニ在テモ其之ヲ魚スルト否トハ一々裁判官ノ判決ニ任ス可キ欵是レナリ

上ノ定規ヲ革メサル可サル所以ノ理ハ次ニ之ヲ詳カニスルカ如シ

例ハハ往日ノ立法中一千七百九十四年癸普漏生諸國ノ普通邑法第二篇第二十章ニ於テ左ノ

論アリ

罪犯人ノ榮譽剥奪ハ或刑ニ於テ必ス之ヲ魚子ナル可ラサルモノトスルカ如キ酷法ハ普漏生ニ於テ曾テ之ヲ知ラサル所ナリ是レ佛蘭西法ニ擬シ始メテ獨乙諸國ノ刑法各ニ採入シタル者ナリ云々

又犯罪ノ内情悪ム可キノ甚シキ者ト或ハ然ラサル者トノ状ヲ示スニハ專ラ榮譽ヲ剥奪スルト否トニ在ル可キ者ナルニ普漏生刑法各ニ於テハ民權剥奪ハ或ル刑類即チ徒刑ニハ必ス常ニ附屬ス可キ者ト定メタルカ故ニ(第十一條)犯罪ノ本性ト其内部ノ趣意トニ於テ全ク状ヲ異ニシタル罪人ニ對シ共ニ齊シク榮譽ヲ剥奪シ

其惡ム可キノ甚シキ者ト然ラサル者トヲ判然區別スル能ハサルノ失錯ヲ招クニ至ル此ノ失錯ヲ防クニハ一千八百六十七年編輯ノ填他利刑法草案(第四十五葉裏面)ニ倣ヒ左ノ事項ヲ以テ裁判官ノ手中ニ委スルニ非レハ別ニ方策ナカル可シ

曰ク爰ニ一所犯アリ其ノ罪由ハ下ケシム可ク卑シム可キ原由ニ係ルカ或ハ然ラサルカ又其犯人ハ榮譽ヲ剥奪ス可キカ或ハ然ラサルカ之ヲ糾明シ之ヲ判決スルハ特ニ裁判官ノ權カニ係ル可シト即チ是レナリ
普漏生刑法各ニ於テ徒刑ニ処セラレタル罪人ハ必ス榮譽ヲ失フ可キノ定規ヲ立テシモノハ

徒刑ニ中ツ可キ罪犯ハ必ス下ケシム可ク卑シ
ム可キ原因ニ起ルベシト考想スルニ依ルリ然
レ氏凡ク考想ニ基キ設ケタル定規ハ刑法上ニ
適用ス可ラス況ンヤ此ノ如キ考想ニ準拠シテ
斯ノ一大事ヲ処分ス可キニ於ニオヤ
蓋シ其処セラレタル刑ノ下ケシム可ク卑シム
可キ者タルカ或ハ然ラサルカ之ヲ認ムルニ諸
人通常因場ノ種類ニ依テ之ヲ判断シ徒刑ハ即
チ國民一般ニ其卑下ス可キ者タルヲ認メ知ル
所ト為スハ却テ之ヲ然ラサルト言フ可ラス然
レ氏之ヲ例セハ一千八百六十三年「バト」國
第二議事堂報誌中孤囚ノ草案ニ載セタル左ノ
法ノ如キハ余之ヲ爰ニ論述スルニ其処ヲ得サ

ルニ非ル可シ
斯ハ如ク人民ノ考想ヲ以テ立法ノ準據トナ
スハ立法官タル者ハ當サニ為スベキ所ニ非
ス而シテ卑下ス可キ罪犯ヲシテ其卑下ス可キ
者ヲテシムルハ之ヲ処スルノ刑類ニモ關ス
可ラス又其刑ヲ受ケシムルノ場所ニモ係ル
可ラス是レ全ク他ノ舉作ニ關係スル者ニシ
テ立法官ノ從事ス可キ所ハ即チ此ノ舉作ヲ
シテ眞ノ適當ヲ得セシムルニ在ルノミ
一千八百十三年九月三十日「元」ノ普漏生王命ニ
依テ榮譽心ヲ失却スルヨリ生シタル輕重罪ニ
在テハ其犯人ノ權利ヲ剥奪シ且國章ヲ附シタ
ル冠帽ヲ用フルトテ禁ス可シト並ニ其ノ當サ

ニ処ロラルヘキ刑ノ種類ハ此ニ關係ス可ラサ
ルノ規則ヲ定メタル所以ノ者モ亦同上ノ趣意
ニ由ル
一千八百三十六年編輯同レテシ刑法草案中左
ノ條件ヲ挙ケシモ亦其趣向ヲ同ウセリ
爰ニ一所犯アリ其ノ罪重キカ故ニ之ヲ徒刑
ニ処スルヲ以テ立法官ハ此ノ犯罪ヲ指シテ
必ス口悉ク榮譽ヲ失却シタル者ト明言スル
コトヲ得ヘカラス如何トナルニ若シ輒テ然ル
ハ或ル重罪人ハ其ノ罪由ノ如何ニ拘ハラス
悉ク之ヲ以テ榮譽ヲ失却シタリト考想セサ
ルヲ得サルカ故ナリ而メ真ニ其榮譽ヲ失却
シタルコトト否トノ別ハ專ラ罪犯ヲナスノ因

縁如何ニ在ル可キナリ
今又「キヨストリ」氏獨ニ刑法論中「千八百五十五
年」トビシク出版第二百十五葉裏面ノ説ヲ
左ニ掲ゲシマシムル
榮譽ニ関ス可キ權利ノ制限ヲ以テ或ル刑類
ニ附屬セシムルハ民心ニ感深シタル思考ニ
基キ今尚ホ一般ニ之ヲ施行スト雖モ必然其
然ル可キ者ト確認シテ之ヲ實踐スルハ其實
ハ忌ム可キノ最モ甚タシキモノナリ云々
然ルニ普漏生刑法層ニ於テハ此ノ如キ考想ニ
出ル者ヲ以テ成法トナシ儼然之ヲ履行セリ今
ヤ假令ト同一ノ考想ニ基キ此法ヲ革メテ
必然榮譽心ヲ失却シタル者トナス可ラサル

重罪ハ必然之ヲ徒刑ニ処ス可キモノニ非ス
斯人如キハ之ヲ禁獄ニ中メ可シ
云々ナラシムルモ亦革却テ其度ニ過キ遂ニ其
本末ノ目的ヲ達スル能ハサルニ至ラシ普漏生
刑法層ニ於テ徒刑ニ當ラタル罪犯中其罪由榮
譽心ヲ失却セシ者ニ非ス故ニ亦榮譽ノ權利モ
剥奪ス可キ者ニ非スレテ專ラ其危難ノ性アル
ト其法律ヲ破ルノ甚シキトニ依ル者輕罰ナル
禁獄ハ之ニ適スルニ足ラズ重罰ナル徒刑ヲ以
テ之ニ課セサルヲ得サルトアルヲ以テ之ヲ徒
刑ニ當ラタル者中ノ八九ニ居テ然リ而メ
常ニ徒刑及ビ禁獄ヲ撰ンテ其一ヲ課センナ欲
スルハ現ニ普漏生刑法層ニ於テモ甚ク稀少ナ

ル場合ニシテ極テ適當シタル者アラサレハ安
リニ此課法ヲ行フ能ハス例ハ竊盜再犯(同層
第二百十九條)及ビ故造破産(同層第二百四十六
條)ニ在テ然カモ量酌セサルヲ得サル可キ情状
アルニアラスンハ此課法ヲ用ヒサルカ如ク此
法ハ立法上ノ一變則タルニ過キサルヲ以テ之
ヲ普通ノ定規ト爲スハ決シテ稱讚ス可キナ
非ルナリ
右數件ノ理ニ從ヒ草案本條ニ於テハ遂ニ左ノ
議ニ決定シタリ
總テ徒刑ノ裁判ヲ下スニ就テハ兼テ國民タ
ル可キ榮譽ノ權利ヲ剥奪スルヲ得ヘシ
草案ニ於テハ此規則ハ死刑ニ在テモ亦之ヲ適

用スルヲアルヲ明言セリ○死刑表論以下

斯ノ如ク草案ニ於テハ総テ死刑或ハ徒刑ノ裁

決ヲナスニ就テ民権剥奪ヲ兼子シムルヲアル

ヲ預メ許可セリトモ其ノ他ノ刑ニ在テハ條下

故ラニ之ヲ明許シタルモノニ非レハ更ニ民権

剥奪ヲ兼ネシム可ラサルノ規則ヲ制定セリ

又草案ニ於テハ實際粗畧ニ過ルノ失誤アラン

トテ恐レ之ヲ豫防センカ為メニ左ノ規則ヲ設

ケタリ

條下特ニ定規ヲ挙ケタル各重罪之ヲ例セハ

偽誓(第百三十四條)乃至百三十六條謀合容止

重犯(第百五十八條)及ヒ脅迫重犯第二百三十

一條第二項ニ在テハ本刑タル可キ羈絆刑ノ

外必ス民権剥奪ヲ兼ネシム可シ其官職ヲ奪

ビ及ビ再任ヲ許ス人如何ハ又其條ノ揭示ニ

準フ可シ

第二十六條 第二十七條

○草案本條ニ於テハ民権剥奪ノ処分ニ就テ一

定ノ規律ヲ立テ止タ公然ノ榮譽ニ係ル權利ノ

之ヲ剥奪ス可ラシメントス

然レ氏凡ノ谷般ノ罰則ニ於テ此刑法書ニ掲ケ

タル者ノ外他ノ權利ヲ剥奪スルヲアルハ此限

ニ非ルナリ

今此ノ北獨乙刑法層ノ規則ヲ擴張シテ他ノ諸

罰則ノ條件ヲ廢セシメント欲スルニハ其罰則

中本幹タル可キノ部分ヲ全ク変態セシムルニ

裁判ニ
依テ榮
華ノ權
利ヲ削
限ス

非レハ能ハサル所ナリ故ニ草按ニ於テハ北獨
乙刑法書発行ノ時ニ當リ己ニ實施セル所ノ諸
條例及ビ諸罰則中ノ條件ニシテ該刑法書ニ在
テ明白ニ其廢止ヲ令セサルモノハ悉ク旧貫ニ
仍リ之ヲ保存セシメタリ
普漏生刑法層ニ於テ制定セシ所ノ終身元ニ有
期民權剝奪ニ処セラレタル犯人ノ權限經界ハ
其犯人ヲシテ証據人或ハ識事人トナリテ公誓
ニ與カル下ヲ得セシメサルヲ以テ殊ニ狭小ナ
リト謂フ可シ夫レ証據人タルヘキ權利ハ他國
ノ立法例ハハ「サツキセン」「ハツセン」「オル
デンブルグ」及ビ「リュール」ノ諸立法ニ於テ己ニ公認シタ
ルカ如ク全ク國事ニ關シタル榮譽ノ權利ニ非

ルナリ一千八百六十四年「ウビーン」出版ワール
ブルグ氏カ刑事裁判ニ就テノ民權制限論第三
十九葉表面ヲ併觀ス可シ故ニ之ヲ禁抑スルハ
其罪犯ノ本性ニ依リ其罪人國法ニ從ビ証據人
トナルニ就テ法律維持ノ為メニ必ス各人ト共
有ス可キ普通ノ信義ヲ獨リ失却シタルノ確証
アルニ非レハ之ヲ適當シタリトセス
偽誓ノ罰ニ処セラレシ罪人ハ果シテ此ノ如キ
信義ヲ失却シタルニ違ハサル可シ故ニ草按ニ
於テ偽誓ノ罪人ハ証據人タル可キノ權利ヲ有
ス可ラサル者ト為セリ(第百三十四條乃至百三
十六條ト比考スヘシ)
○民權ヲ剝奪スルニ就テハ各爵位及ビ貴族ノ

尊爵亦之ヲ失ハシム可キ歟此ノ一議問ハ殊ニ
至難ノ事項タリシ
此ノ議問ハ太夕緊切ナルヲタルカ故ニ次ニ之
ヲ詳明セント欲ス
普漏生普通國法ニ於テハ貴族若シ重罪ヲ犯シ
之カ為メニ除族ニ処セラル可キ者ハ裁判言渡
ノ時明白ニ之ヲ告ケ置ク可キノ法ヲ制定シ普
通國法各第二篇即チ貴族ノ義務及ビ其權カヲ
論スル篇第九章第九十一條ニ於テ尤ノ規則ヲ
置ケルハ本邦ノ刑罰ノ貴族ノ國法ニ於テ
猛惡ナル重罪ヲ犯シタル貴族ハ裁判ニ依テ
其族ヲ削除セラルルヲアル可キ事也
而メ其次條(第九十二條)ニ於テ

如何ナル場合ニ在テ貴族ノ族ヲ削除ス可キ
カ其詳ナル規律ハ一々之ヲ刑法中ニ掲ケタ
トアルヲ以テ之ヲ律例各中ニ檢スルニ(第二十
章)特ニ適當ノ罰トシテ貴族削除ニ処ス可キノ
罪科ハ唯夕一事項アルニ即チ同書第六百九
十二條ニ曰ク
二人鬪ノ犯罪人ハ之カ貴族ヲ削除ス可シ云
是ナリ
同書中他ノ各條ニ於テハ常事重犯ハ總テ國民
タル榮譽ノ權及ビ諸官位或ハ爵位ノ權ヲ悉ク
剥奪ス可キ總括ノ規則ヲ掲クルノニ第九十五

條百三條六百三十三條千四百五條千四百五十
三條千四百六十一條ヲ合觀ス可シ
此等ノ條々殊ニ前ニ掲ケタル第九章第九十一
條及ビ第九十二條ノ規則ニ從ヒ

凡ソ榮譽心ヲ失却スルト判然タル諸重罪犯
ニシテ之ニ相應ノ罰ヲ加ヘント欲セハ悉ク
其本刑ニ貴族削除ヲ兼ネシム可シ

トノ議ヲ起セリ而シテ此議ヲ最上立法官ノ認可
スル所ニシテ同國法各出版後直ニ(一千八百
四月十九日)左ニ載セタル内閣命令ヲ発スルニ
至レリ

貴族ニシテ竊盜若クハ類似ノ重罪ヲ犯シ漸獄
ノ刑ニ處セラルルハ片ハ兼テ之レヲ除族セシ

今可シ新國制各第十冊第九百六十八葉表
面

是ヲ以テ一千八百三十七年二月十八日主命法
令纂集第十五葉裏面ヲ下セシヨリ以降普通國
法ヲ適用スル所ノ諸邦及ビ後年ニ至テハ「
ン」地方ノ諸國ニ於テモ貴族ニシテ榮譽心ノ失
却ヲ証スルニ足ル可キ重罪ヲ犯シタル片ハ必
ズ本刑ニ兼テ貴族削除ノ裁判ヲ言渡シタリ
一千八百五十一年四月十四日頒行ノ刑法各ニ
於テハ斯ノ如ク特ニ除族ヲ言渡スノ法ヲ廢シ
凡ソ榮譽ノ權利ヲ剝奪スルハ一々之ヲ言渡サ
スシテ天ノ徒刑ニ處セラレタル者ハ必スヤ終
身若クハ有期民權剝奪ヲ兼ネサル可ラサルノ

規則ヲ制定シ貴族削除ニ即テ此ノ規則中ニ編
入セシメタリ

同書第十ニ條ニ於テ民權ヲ剝奪スルハ第一
項云々第二ニ項貴族ヲ削除ス可シトアリコト第一
貴族削除ヲ於テ有期民權禁抑ハ必ス

一千八百五十年編成草案ニ附属シタル政府ノ
弁譯書ニ於テ此貴族削除ノ法ニツキ弁解ヲナ
ス下左ノ如シ

貴族削除ノ法ヲ設クルニ就テハ數般ノ誹議
アルヲ顧ミスシテ之ヲ等閑ニ看過シタルニ
非ス虽然此等ノ誹議ハ皆十正理ヲ得タル者
ニ非ルヲ如何セン夫レ貴族ノ爵ヲ剝奪シテ
之ヲ平民ニ下ストハ徒刑ニ処セラレタル貴
族ヲ除族シテ之ヲ榮譽ヲ全フセル平民ト同

等ノ地位ニ置クコトヲ謂ヒ非ス曾テ罪セラ
ル所アリテ民權ヲ剝奪セラレタル平民ノ部
類ニ陥ラシムルヲ謂フナリ若シ此貴族ノ爵
ハ生來ノ所得ニシテ其人即チ其血族ニ固有
シタル權ナレバ之ヲ剝奪スルハ條理ニ適ハ
サルモノトセハ凡ソ諸般ノ特榮特恩稱ハ祖
考ノ遺傳ト自ラ護タルトテ問ハス悉ク其人
ニ固有シタル者ナレバ民權ヲ剝奪スルニ就
テ亦之ヲ奪フノ理ナカル可キナリ

一千八百五十一年刑法草案ヲ委任セラレタル
第二議事堂議員ヨリ出シタル報誌中第十二條
ノ規則ニ於テ論スル所ノ主旨大畧左ノ如シ
今ヤ貴族ハ己ニ特殊ノ爵位ニ非ス然レモ未タ

全ク之ヲ消滅シタル者トハ見做ス可ラス其成
立ハ尊称及ヒ勳爵ト同シク單ニ外部ノ特栄ヲ
標示スルニ在ルノミ而シテ國制書第五十節ニ準
シ他ノ特權ヲ兼ネサル諸特栄ノ如ク國王ヨリ
新ニ之ヲ下賜スルヲ得可キ者ナリトス故ニ
貴族ノ榮ハ此等ノ時榮即チ尊称及ヒ勳爵ト同
一物タルヲ免カレス然ルニ民權ヲ剝奪スルニ
就テ此等ノ特栄ハ必ス之ヲ奪フ可シトセハ貴
族ノ榮モ亦消除セサルヲ得サル可シト
此草案ヲ委任セラレタル議員ハ此政府ノ弁解
ヲ可トシ貴族削除ノ法ヲ起草セリ而シテ前ニ舉
ケタル第十二條及ヒ第二十二條ノ諸規則ハ其
草案ニ仍テ全ク之ヲ普漏生刑法法昏中ニ収用シ

タル者ナリ
此貴族削除ノ問題ニ付キ北獨逸聯邦中他ノ諸
立法ニ於テ起ス所ノ議案各々相懸隔セリ
「イ」於テハ大ニ「イ」除族ノ法ヲ可トセリ然レモ「イ」サッキ
「イ」ハ「イ」セ「イ」メツクレ「イ」ブルガ「イ」シユウ「イ」ハ「イ」サッキセ
ン「イ」ワイ「イ」マ「イ」ル「イ」メツクレ「イ」ブル「イ」ズ「イ」スト「イ」ト「イ」リツツ「イ」オ
ル「イ」テ「イ」シ「イ」ブル「イ」ガ「イ」マ「イ」イ「イ」ニ「イ」ゲ「イ」ン「イ」アル「イ」テ「イ」ン「イ」ブル「イ」グ「イ」コ
ト「イ」ブル「イ」グ「イ」ゴ「イ」ト「イ」タ「イ」ト「イ」ア「イ」ト「イ」ン「イ」ハ「イ」ルト「イ」シ「イ」ユ「イ」ワ「イ」ル「イ」ツ「イ」ブル
グ「イ」ルト「イ」ドル「イ」フ「イ」ス「イ」タ「イ」ツ「イ」ト「イ」ソ「イ」ン「イ」デル「イ」ス「イ」ハ「イ」ウ「イ」セ「イ」ン「イ」旧族
コ「イ」イス「イ」新族コ「イ」イス「イ」シ「イ」ヤ「イ」ウ「イ」ム「イ」ブル「イ」グ「イ」リ「イ」ツ「イ」ペ「イ」リ「イ」ユ「イ」ト「イ」バ「イ」ッキ「イ」
ブル「イ」ト「イ」メ「イ」ン「イ」及「イ」ヒ「イ」ハン「イ」ブル「イ」グ「イ」ノ「イ」諸立法ニ於テハ
此般ノ成規ナシ

此獨乙外ノ諸國ニ於テモ其法各同シカラス之
ヲ例ビハ「バイエルン」(同國刑法各第十八節第
一項)「ウエルテンブルグ」(同國刑法各第二十三節第
二項)及「オースタリヤ」(同國刑法各第二十七條)
ノ諸立法ニ於テハ之ヲ可ト為シ「バトデン」(同國
刑法各第十七節)ノ立法ニ於テハ之ヲ不可ト為
スカ如シ
獨乙外諸國ノ立法如何ヲ知ラント欲スルニ太
ク貴重ナル「ベルギー」ノ新律各一千八百六十七
年六月九日頒行ノ規則ヲ左ニ掲載ス
「ベルギー」ノ刑法各
第三十一節
死刑或ハ懲役刑ノ裁判ニ就テハ必ス其罪人

ニ言渡スニ終身左ノ權利ヲ禁抑スルヲ以
テテ不可シ
第一項
第二項
第三項 貴族ノ尊稱ヲ有スルヲ云々
第三十二節
陪審裁判所ニ於テハ徒刑及ヒ禁獄ニ処セテ
レタル罪人ニ對シ終身若クハ十年乃至二十
年間前ニ掲ケタル權利ノ全分或ハ其幾分ヲ
禁抑スルヲ得ハシ
第三十三節
各種裁判所ニ於テハ改良ノ刑ニ処セラレタル
ル罪人ニ規則ヲ揭示シ預メ之ヲ明許シタル

條件ニ限リ五年乃至十年間第三十一節ニ掲
ケタル權利ノ全分或ハ其幾分ヲ禁抑スル
ヲ得ヘシ

除族ノ刑即チ或ル刑ニ処セラレタル貴族ニ對
シ兼テ其族ヲ削除スルノ法ニ就テハ抗論家甚
タ多ク與論家亦太タ夥シ
甲者曰漸獄ノ刑トシテ貴族ヲ除族スルハ元來
單ニ其榮譽ヲ奪ハント欲スルニ在ルノミ然ル
ニ此刑ニ処スル片ハ被刑本人ハ貴族協救ノ社
益及ビ貴族特有ノ財産ヲ失フヲ以テ是レ兼テ
資財ノ權利ニ關係スル苛酷ノ刑ト見做ス可ク且
其罰本人而已ナラス無辜ノ卑族親ニ連及シ本
人死後ト雖氏其資財ノ權利ハ無窮ニ至ルマテ

竟ニ回復スルヲ能ハサルカ故ニ此刑ハ決シテ
取ル可キ者ニ非ルナリトイフハ百四十一年
テ百四十一年ニイハレ氏刑法事立八百六十
第百四十一年ニイハレ氏刑法事立八百六十
出刊限論第三十卷表八百六十
利刊限論第三十卷表八百六十
春註解第一冊第五十卷表八百六十
六氏刑事立河野國民堂權上出
三氏刑事立及スル第百五十五卷表八百六十
五年公國刑法書上出第百五十五卷表八百六十
大スツトガ書上出第百五十五卷表八百六十
年及論第九十九卷表面
刑者曰貴族ノ榮ハ國王ヨリ下賜スル特榮ノ一
ナリ他ノ特榮即チ尊稱ニ之ヲ剝奪スルヲアリ
貴族ノ特榮ノミ何ソ獨リ然ラサルヲ得ンヤ前
二二議事堂ノ報誌○生刑法書第十一卷除年訣及比第

退職
料受
ラク
禁ス

刑書註解第五十四卷東面
刑論六部
照スニ行政上ノ特權ヲ有ス可キ者ニ非スト
モ一箇ノ特榮タルニ於テ何ノ異ルカ之レ有
ン而ノ他ノ特榮ハ其所有主若シ断獄ノ刑ニ処
セラル、片ハ之ヲ剥奪シ貴族ノ榮ノミ獨リ然
セサルノ理ナシトト出版ノ百四十一年
ル表テ面ノバキハ百四十四年註解第一冊第
第一冊第百四十四年註解第一冊第百四十四
法律學師ハ斯ノ如ク討論シ各國ノ立法ハ各其
成規ヲ異ニシ未タ孰レカ是非ナルヲ知
ラス故ニ州案ニ於テハ北獨乙中當今最大ノ土

第二十八條

地ニ在テ施行セラル、所ノ法ヲ存シ即テ普遍
生刑法書ノ例ヲ變セサル片ハ其過テ却テ淺小
ナラン一ヲ信シタリ
○退職ノ官吏民權剥奪ニ該テラル、片ハ退養
完ニ恩賜金ヲ受ル一ヲ禁止スルノ規則ハ普遍
生刑法書第二十三條ト一致セリ此法ニ對シ亦
抗論ナキニ非ス左ノ説ノ如キ即テ是レナリ
凡ソ此般ノ規則ハ刑法層ニ屬スルモノニ非
ルナリ云々
昔日官ニ在テ勤勞セシニ由リ受ケ得タル所ノ
金ヲ請求スルハ其權利アルト他ノ私法ニ從ヒ
當サニ得ヘキノ資財ヲ請求スルト毫モ異ナル

處刑後
 追テ民
 權ヲ剥
 奪ス

等ニ其民法上ノ義務タルヲ説解スト雖モ彼
 等ハ畢竟其理ニ甘心服膺スル能ハサル可シ

第二十九條

○草案第四條第三項ニ於テ公認シタル一罪ヲ
 二回ニ罰ス可ラサルノ定規ヲモ此ニ聊カ変例
 アラシメサルヲ得ス外國ニ於テ此獨乙人ヲ処
 刑シ其罰民權剥奪ヲ兼ネサルアリ而シテ内
 國人律ニ照ラセハ其剥奪ヲ兼ネサル可ラサル
 者ニ在テ即チ然リトス
 何トナレハ此ノ如キ外國処刑人ニ限リ必
 ス之ヲ内國処刑人ヨリモ善良ナル者ト見
 做ス能ハサルヲ以テ裁量スル可キ

...



